宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書

第56集

宇治市街遺跡（川東・川西地区）、菟道遺跡、
若林遺跡、宇治上神社遺跡

2004

宇治市教育委員会

序

戦後初めての長期不況に伴い、宇治市も例外ではなく大規模開発そのものは減少傾向をたどっています。しかしながら小規模な開発は決して少なくなく、いずれも地道な調査ではありますが、いくばくかの重要な知見を得ることができました。

本書は、宇治市教育委員会が開発事業に伴って発掘調査しました宇治市街遺跡(川東地区・川西地区)・菟道遺跡の3件と主要な立会調査の成果2件に、白川金色院跡で採集した資料の報告を合わせた計6件について報告するものです。

宇治市街遺跡では、川東地区では近世から近代にかけての茶屋の跡が検出され、川西地区では平等院創建期頃の土師器が出土し、付近に別業の存在が考えられました。

菟道遺跡では8世紀中頃の掘立柱建物や井戸等が検出され、実態の不明だった8世紀中頃の菟道地域の歴史を考える貴重な資料となりました。

立会調査では、若林遺跡で未知の古墳の存在、宇治上神社遺跡で12世紀にまでさかのぼる土師器が出土しました。いずれも重要な発見といえるものです。

これらの成果をまとめた本書が多くの方々の目にとまり、広く宇治の歴史を知る契機となることを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発事業者の方々をはじめ、調査期間中にご指導・ご助力を賜りました関係各位に対して心より御礼を申し上げます。

平成16年3月

宇治市教育委員会
教育長　谷口道夫

例　　言

1．本書は、『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』の第56集である

2．本書は、宇治市教育委員会が平成14・15年度に実施した、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び主要な立会調査の成果を取りまとめたものである。

名　　称	調　査　地	原　因	調 査 期 間	調査面積
宇治市街遺跡（川東地区）	宇治東内16	店舗建設	平成14年11月～平成15年1月	200㎡
菟道遺跡	菟道大垣内4他	宅地造成	平成15年6月～8月	302㎡
宇治市街遺跡（川西地区）	宇治里尻29-8	集合住宅	平成14年5月	39㎡
若林遺跡	伊勢田町若林16-15	個人住宅	平成14年5月	（立会）
宇治上神社遺跡	宇治山田59	防災施設	平成15年1月～3月	（立会）

3．発掘調査は、下記の体制で実施した。

発掘主体者：宇治市教育委員会

発掘責任者：宇治市教育委員会　教育長　谷口道夫

発掘担当者：宇治市歴史資料館　文化財保護係　荒川　史

浜中邦弘

発掘事務局：宇治市歴史資料館　館長　五艘雅孝

主幹兼文化財保護係長　吉水利明

館長補佐　岡井毅芳

調査参加者：奥　里子・大原　瞳・西田倫子・久保千恵子・志村みどり

4．本発掘調査の関係資料及び出土品は、宇治市教育委員会が保管している。

5．本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を荒川・浜中が担当した。執筆分担は下記のとおりである。

Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ …… 荒川　史

Ⅱ－1～3・5、Ⅳ・Ⅵ …… 浜中邦弘

Ⅱ－4 …… 奥　里子（奈良大学学生）・大原　瞳（天理大学学生）

Ⅰ－3 …… 大西晃靖（㈱文化財サービス）

本書に収録した調査地の位置

目　　次

Ⅰ．宇治市街遺跡（東内16）発掘調査報告
1．はじめに …… 1
2．調査の概要 …… 2
3．出土遺物 …… 12
4．ま と め …… 16

Ⅱ．菟道遺跡（大垣内４他）発掘調査報告
1．はじめに …… 17
2．調査の経過 …… 17
3．検出遺構 …… 20
4．出土遺物 …… 27
5．ま と め …… 30

Ⅲ．宇治市街遺跡（里尻29-8）発掘調査報告
1．はじめに …… 31
2．調査の概要 …… 31
3．ま と め …… 32

Ⅳ．若林遺跡（若林16-15）立会調査報告
1．調査の概要 …… 33
2．出土遺物 …… 33
3．ま と め …… 34

Ⅴ．宇治上神社遺跡（山田59）立会調査報告
1．調査の概要 …… 35
2．ま と め …… 36

Ⅵ．白川金色院跡採集資料報告 …… 37

抄　　録 …… 38

Ⅰ．宇治市街遺跡（東内16）発掘調査報告

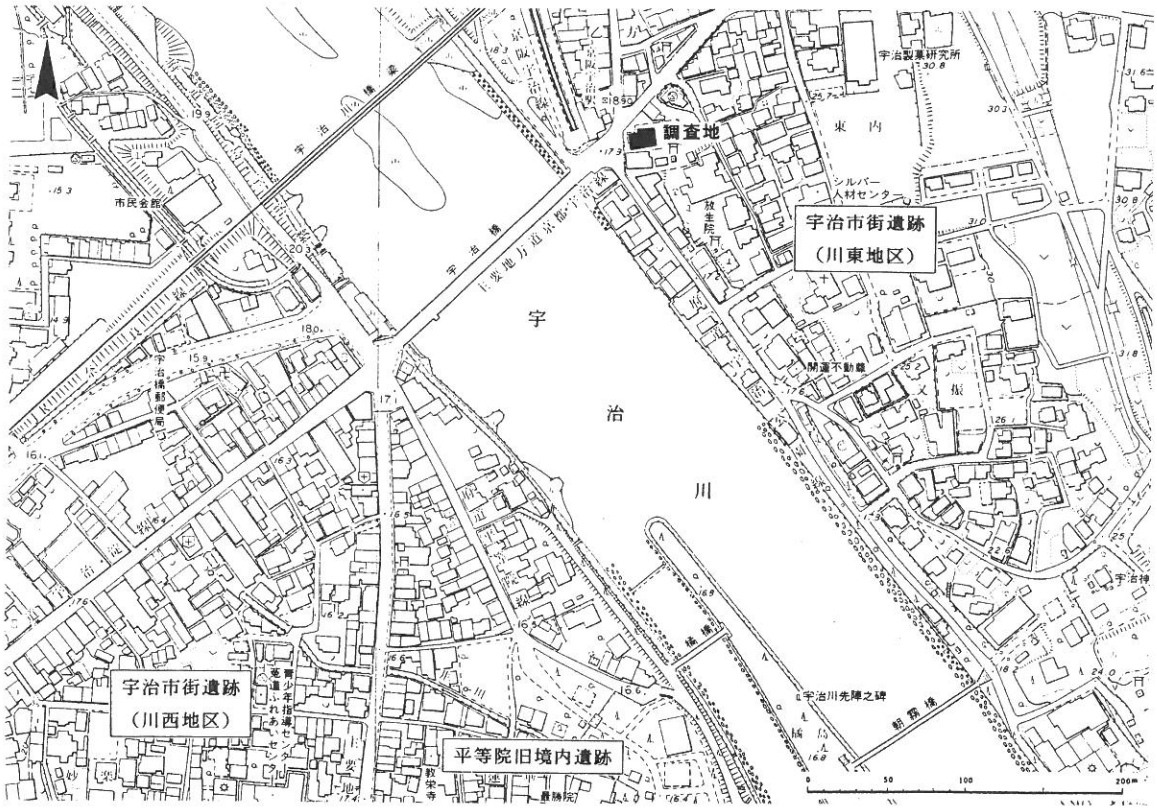
1．はじめに

本報告は、宇治市宇治東内16番地で実施した、株式会社京阪エバーナイス社による店舗建設に伴う宇治市街遺跡の発掘調査報告である。

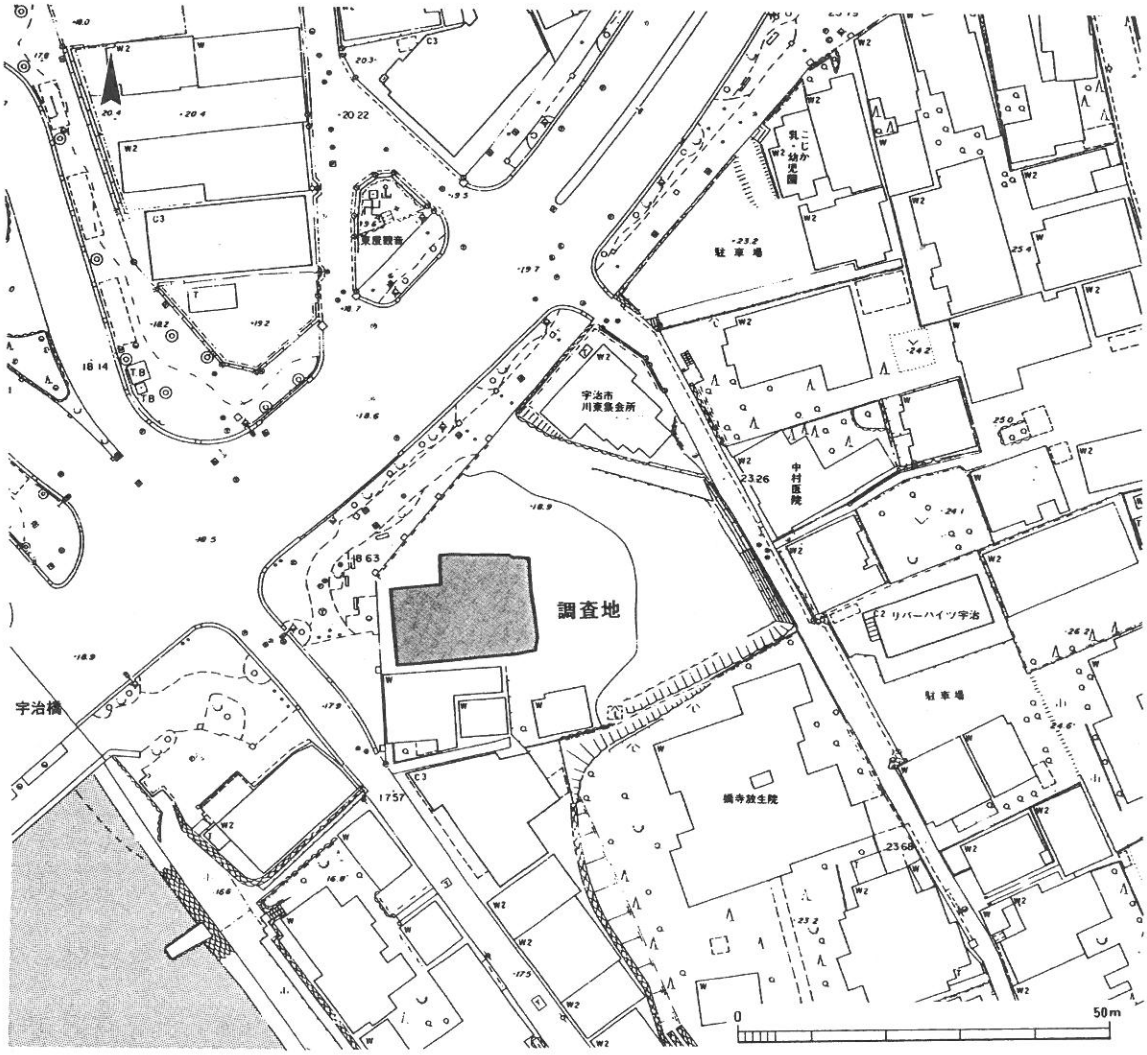
本調査地は、宇治橋の東詰にあたる。宇治橋東詰の地形は、川のそばまで段丘崖が迫っており、この段丘上には宇治神社、橋寺放生院などがある。段丘崖は調査地のやや北側まで川に平行して続くが、そこから東に折れていく。段丘崖の下には標高約17.5mで、幅30～40mの平坦地があり段丘との比高は約５mである。

本調査地は、この段丘崖をＬ字形に削り込んで段丘下の平坦地の高さに揃えている。これは現在府道京都宇治線が造られたためで、明治時代の地籍図によれば本調査地の部分のみコの字形に平坦地が造成されていたようである。この造成の状況は江戸時代前期の『宇治郷総絵図』にも見え、宇治橋との関係で行われたことを予想させ、さらに橋寺の関連施設の存在も予想された。

調査は、平成14年11月20日から平成15年１月17日まで行い、調査面積は200㎡である。



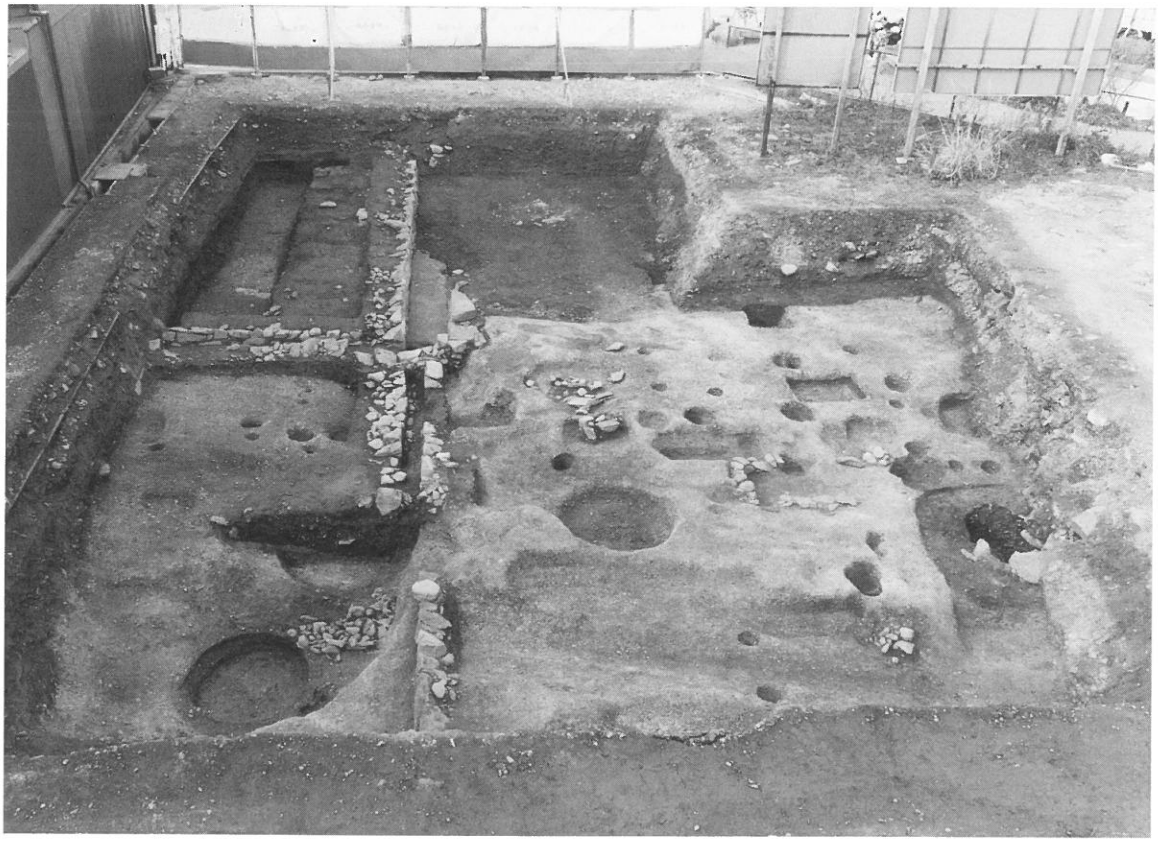
第１図　調査地の位置



第２図　トレンチ配置図

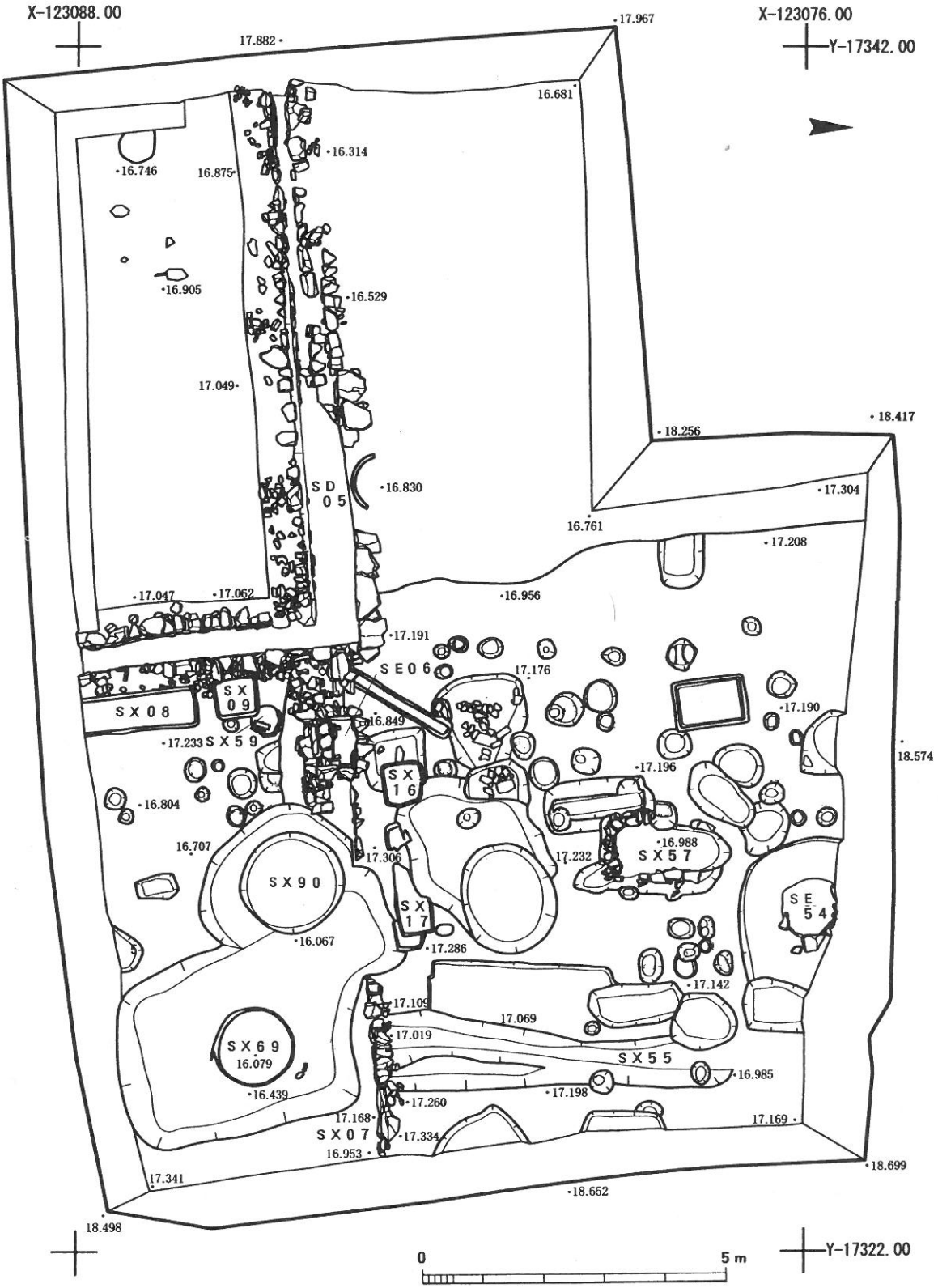
２．調査の概要

トレンチは、建築予定建物のうち、掘削を行わないエントランスを除いた部分に設定した。トレンチ西側より重機掘削を行ったが、地表下約１ｍで黄褐色シルトによる整地層を検出し、トレンチ中央部で東西方向の石積溝を検出した。整地層は石積溝の南側にのみ見られ、北側には認められなかったため、さらに約0.8m重機で掘り下げた。トレンチ東半部では、溝の北側で大阪層群と思われる黄褐色砂礫を検出し、本来の段丘崖の位置を確認した。トレンチ南東部では、コンクリートの基礎があり、これを重機で撤去したため、他の面より一段掘り下げた状態となったが、その下層から礫の集積などが見られ何らかの遺構があることがわかった。遺構は、最初に掘り下げたトレンチ北西部以外のほぼ全域で確認され、石組み井戸、石垣、土壙、ピットなどを検出した。さらに並列する漆喰で造られた方形と長方形の箱形の遺構があり、これが製茶のための焙炉と判断されたことから、これらの遺構が近世から近代



第3図　調査地全景（東から）

第4図　調査地全景（西から）

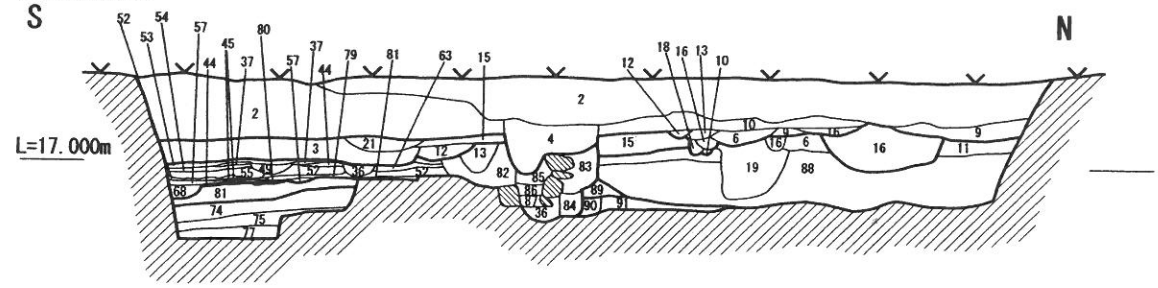


第５図　トレンチ平面実測図

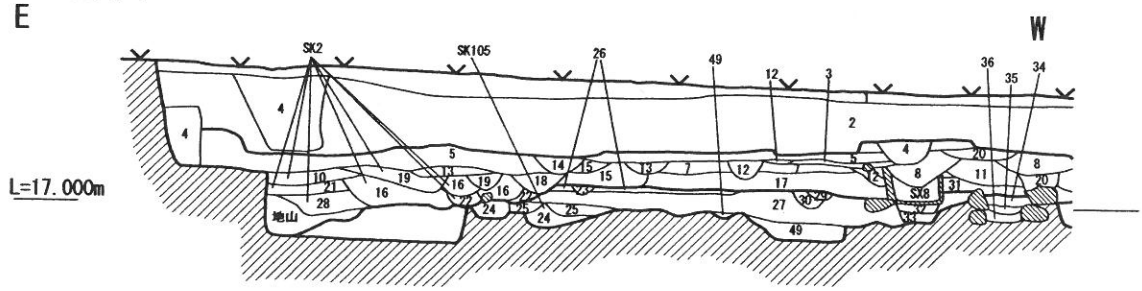
第6図　溝SD05（西から）

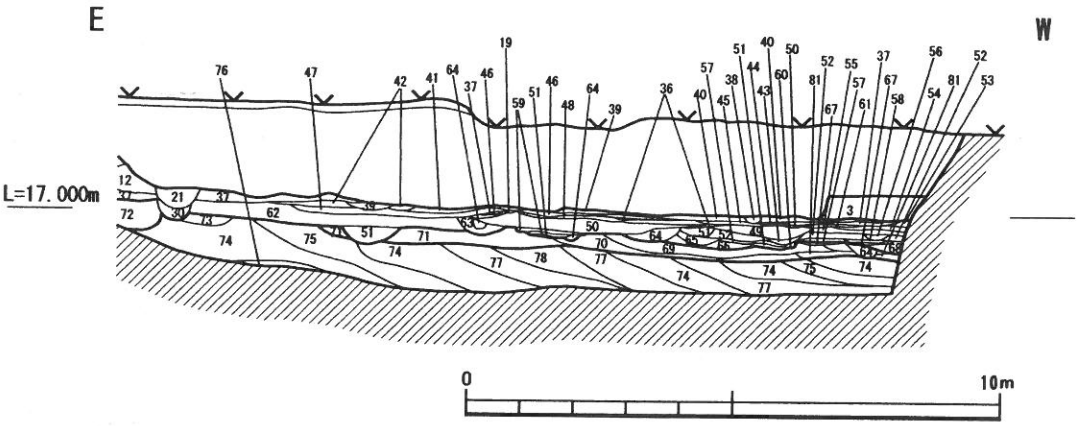
第7図　溝SD05（南から）

西壁断面図



南壁断面図





土層凡例

1.表土　2.盛土　3.にぶい黄褐色土　4. 攪乱　5.暗褐色土　6.暗褐色土　7.暗褐色土（炭混入）
8.にぶい黄褐色土　9.にぶい黄褐色土（炭混入）　10.にぶい黄褐色泥土　11.暗褐色土(炭少量混入)
12.灰黄褐色土　13.暗褐色土　14.にぶい黄褐色土（炭混入）　15.にぶい黄褐色土　16.褐色土
17.にぶい黄褐色土（炭、焼土混入）　18.にぶい黄褐色土　19.にぶい黄褐色土　20.にぶい黄橙色土
21.にぶい黄褐色土（にぶい黄褐色泥土混入）　22.暗褐色土23.褐色土　24.黒褐色土（礫混入）
25.暗褐色土　26.暗褐色土　27.黒褐色土（炭、焼土少量混入）　28.暗褐色土(炭混入)
29.暗褐色土(褐色砂泥混入)　30.灰黄褐色土（炭混入）　31.にぶい黄褐色土　32.灰黄褐色土
33.にぶい黄褐色土(炭混入)　34.にぶい黄褐色土(炭混入)　35.にぶい黄褐色土 36.灰黄褐色土（34～36　SD5)
37. 褐色土　38.にぶい黄褐色土　39.にぶい黄褐色土　40.黄褐色砂質土　41.にぶい黄褐色泥土(砂混入)
42.褐灰色土　43.褐灰色土（炭混入）　44.炭層　45.焼土層　46.にぶい黄褐色土　47.褐灰色土
48.灰黄褐色土（にぶい黄橙色砂泥混入）　49.にぶい黄褐色砂質土　50.灰黄褐色土　51.黒褐色土（炭、焼土混入）
52.暗褐色土（炭混入）　53.黄褐色土　54.にぶい黄褐色土（炭混入）　55.黒褐色土　56.褐灰色土
57.にぶい黄色粘土　58.黒褐色土（にぶい黄褐色泥土混入）　59.にぶい黄褐色砂（粗い砂）60.黒褐色土
61.暗褐色土　62.にぶい黄褐色土　63.にぶい黄橙色土　64.褐色土　65.灰黄褐色土
66.黄橙色黒褐色土（炭混入）　67.黒褐色土　68.黒褐色土(炭混入)　69.黒褐色土
70.にぶい黄褐色土　71.暗褐色土　72.にぶい黄褐色土（炭、焼土混入）　73.にぶい黄褐色土
74.褐色土　75.褐色砂質土　76.黒褐色泥土　77.褐灰色泥土＋礫　78.暗褐色土　79.暗褐色土
80.にぶい黄橙色土　81.黒色土(炭混入)　82.黒褐色泥土(礫混入　SD5掘形)　83.灰黄褐色泥土（SD5)
84.黒褐色泥土(炭混入　SD5掘形) 85.褐灰色土　86.褐灰色砂　87.黒褐色泥土（85～87　SD5)　88.暗褐色土
89.暗褐色土（炭少量混入）　90.暗褐色泥土(砂混入)　91.にぶい黄褐色土

第８図　トレンチ土層断面図

の茶屋であることがわかった。

A．基本層序

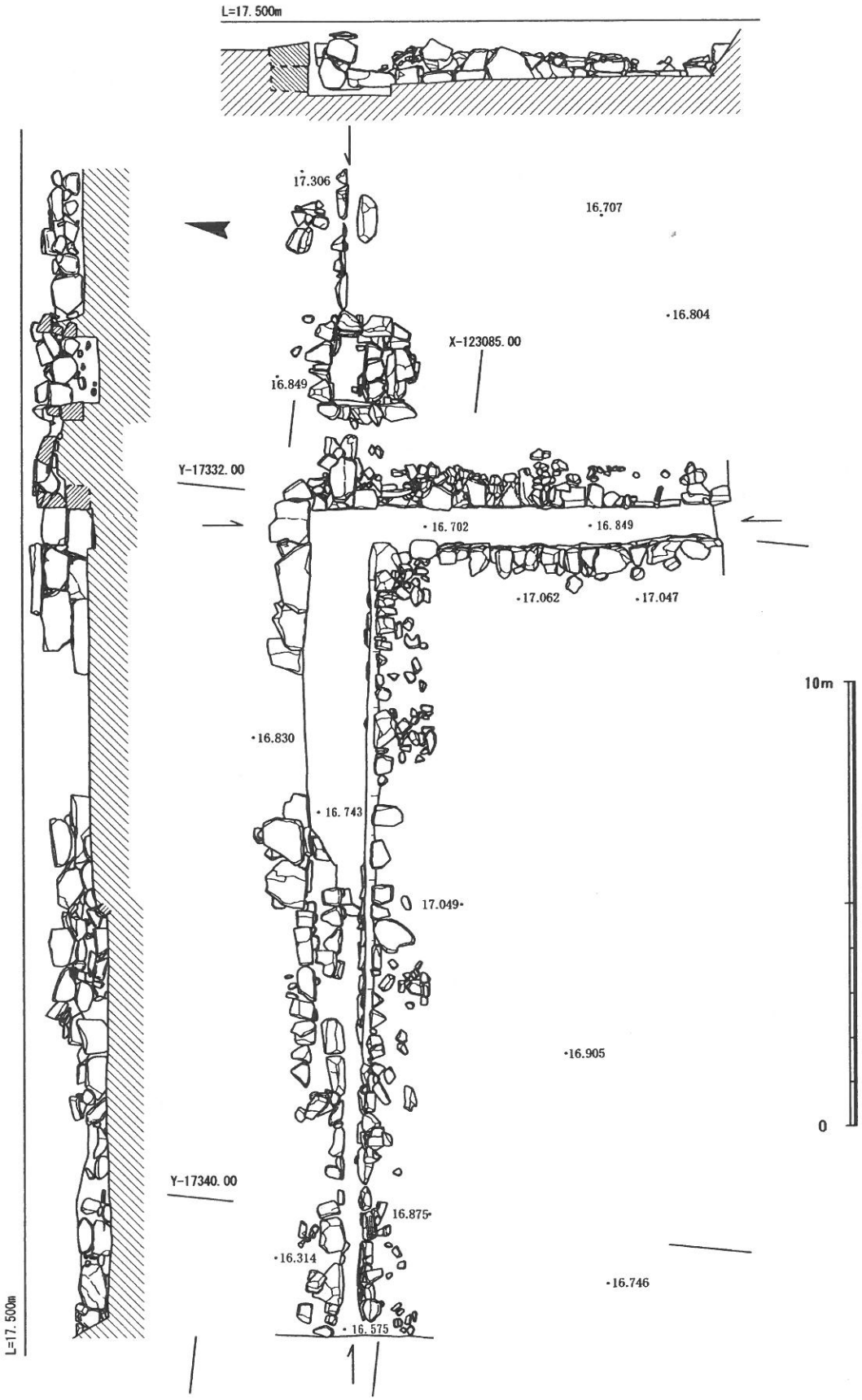
調査地における基本層序は、地表下約１ｍまでは現代の盛土である。それ以下が近世後半から近代の土層となり、３時期の遺構面がある。上層が近代、中・下層が近世後半と考えられる。トレンチ南壁の土層断面によれば、西半部は黄褐色土や黒褐色土を敲き締めて整地しており、三和土の状態を呈しているが、東半部では見られない。この状況は主に調査地南半部の状況であり、後述するように調査地は４区画に分けられ、それぞれ土地利用のあり方が異なるため堆積状況が異なる。遺構面の下層は、東部と西部で大きく堆積状況が異なる。東部は段丘を削平した部分であるため、特に北東部では盛土直下で明黄褐色土の地山となり、ほぼ同一面で各時期の遺構を検出している。西部は、整地層の下層は西に傾斜する褐色系のシルトの堆積となっており、その下層は暗灰褐色砂礫層となっている。氾濫原に段丘崖から土砂が流れ落ちてきた状況を示しているものと思われる。

B．検出遺構

今回のトレンチは、検出した遺構の状況によって、大きく南北の２つの区画に分けられる。つまり石組み溝ＳＤ05と石垣ＳＸ07を結ぶ東西方向のラインによってである。明治時代における地籍図によれば、調査対象地は東内16番地から18番地の３つの地番に分かれており、今回の調査で検出した区画のラインは、16番地と17番地の地境にあたるものと思われる。そして南北の区画はそれぞれさらに東西に分けることができる。この東西に分けるラインは段丘崖のラインにほぼ合致しており、南半部は石組溝ＳＤ05が直角に南に折れ、明確に区画している。

トレンチ南半部の区画では、３面以上の遺構面が認められたが、出土する遺物の時期に大きな変化は認められず、ほぼ18世紀から19世紀の中での改変である。様々な遺構の状況から判断すると、Ｌ字形の石組溝ＳＤ05に囲まれたトレンチ南西の区画が店で、東半部が茶の製造及び居住に関わる区画であると考えられる。トレンチ北西部は明確な整地層が無く、遺構は検出していない。以下、主な遺構について述べる。

石組溝ＳＤ05　トレンチ南西部のＬ字形の石組溝である。東西方向の部分は土地の境界に沿っていたものと思われ、幾度かの改修を受けながらも位置は固定されている。当初は全長13m以上、幅0.2～0.6mの東西溝であったものを、南北方向の溝を新たに掘削したようである。（ＳＤ05ａ）この際に底面と石のすき間に漆喰を入れている。南北方向の溝は幅0.4mを測る。その後北側の石組が崩れたようで、本来の石組みの内側に新たに石を組み、幅約0.2mの溝として使用している。近代においては、溝の中に土管を入れ、排水溝として利用していた。



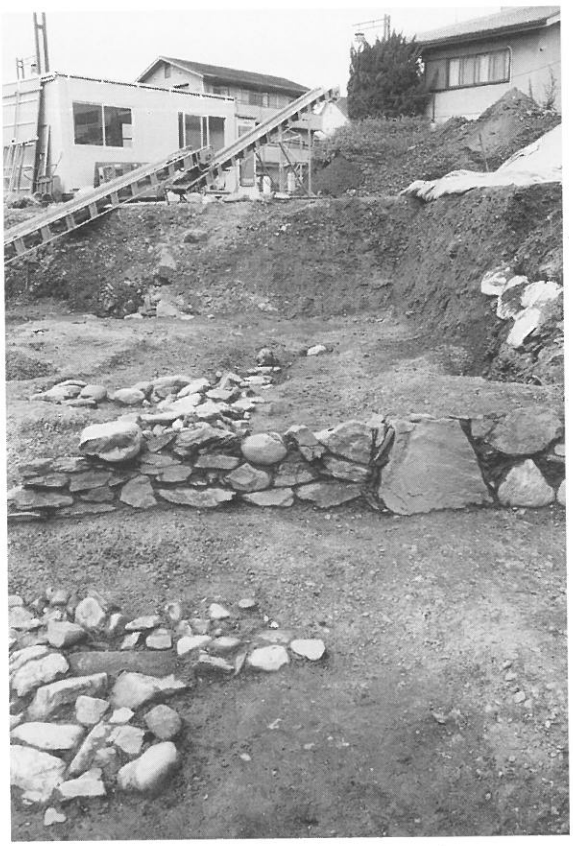
第９図　石組溝ＳＤ05実測図

第10図　溝SD05と店（北西から）

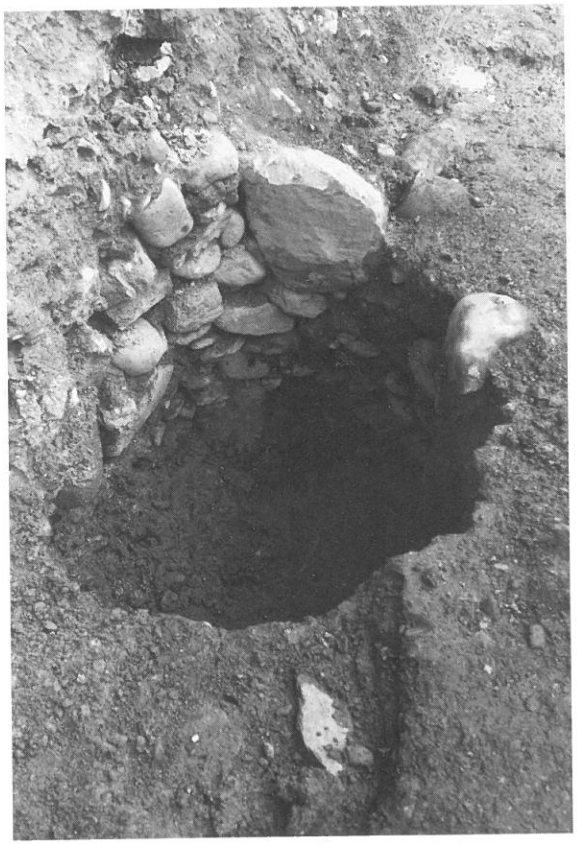
第11図　井戸SE06（南から）

第12図　溝SD05と焙炉SX08・09・16・17（東から）

第13図　焙炉SX08・09（南から）

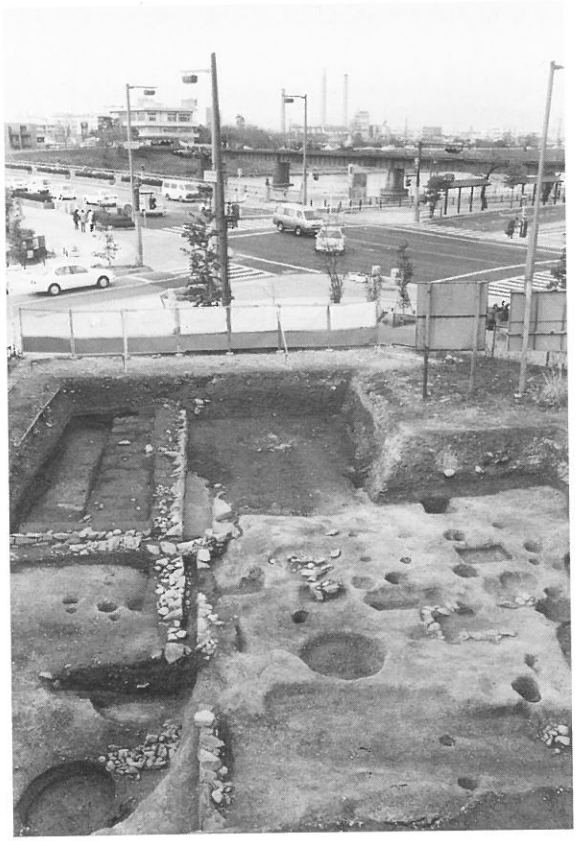


第14図　石垣SX07（南から）



第15図　井戸SE54（南東から）

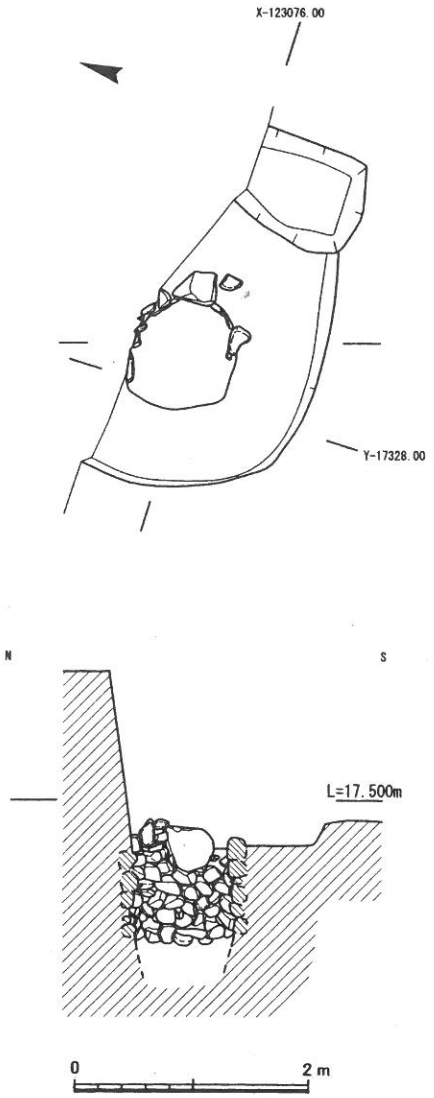
第16図　不明遺構SX69（南から）



第17図　トレンチ西部と宇治橋（西から）

井戸ＳＥ06　ＳＤ05の東側にある方形の石組井戸である。一辺1.25m、深さ0.5mを測る。当初のＳＤ05の上に構築されている。近代の段階には、井戸の底にコンクリートを貼り、水をためるようにしている。

焙炉ＳＸ08・09・16・17　ＳＥ06の北東と南西に長方形と方形がセットになった漆喰で造られた施設を検出した。ＳＥ06の南西になるＳＸ08は長さ1.9m以上、幅0.6mで土層断面の観察では0.45m以上の立ち上がりを持つ箱形の遺構である。ＳＸ08に並んでいるＳＸ09は一辺0.6mの方形を呈する。ＳＸ16・17はＳＥ06の北東にあり、ＳＥ06を挟んで対称的な位置にある。ＳＸ16は一辺0.7m、ＳＸ17は長さ1.7m、幅0.7m。改修して長さを短くしており、新旧の切り合いが確認された。当初どの様な性格か判断できなかったが、茶葉を蒸す竈と、葉を乾燥させる焙炉と考えられる。近代の遺構である。



第18図　井戸ＳＥ54実測図

石垣ＳＸ07　ＳＤ05ａの北側石組の延長上にある南面する石垣で、東はトレンチ外に伸びている。検出長３m、高さ0.5mを測る。当初は東半部のみがあり、西側にはＳＸ07の北にあるＳＸ55からの排水が流れ込んでいた可能性が高い。

井戸ＳＥ54　トレンチ北東部にある円形の石組井戸である。長径1.2m、短径0.9mを測る。西側の石組が崩れていたため、１mで掘削を断念した。

不明遺構ＳＸ69・90　トレンチ南西部にある円形の遺構である。ＳＸ69は直径1.3m、ＳＸ90は直径1.7mを測る。桶を埋置したものと思われ、竹製のタガが２段遺存していた。草戸千軒町遺跡でも類似する遺構が検出されており、座棺の可能性が指摘されているが、ＳＸ69・90の場合遺構の検出位置から見てその可能性は低く、性格は不明である。

3．出土遺物（第19～22図）

出土遺物は、18～19世紀のものが大半を占める。少数であるが、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿（1）、桃山時代の瀬戸皿（2）、唐津皿（3）がある。

土師器皿（1）は、口縁部に2段ナデが施され、口縁端部が外反する。表面は摩滅が著しい。瀬戸皿（2）は、口縁が外反し、端部は上方に丸く収める。灰釉を漬け掛けにし、底部外面は露胎である。唐津皿（3）は、口縁に輪花を施す。灰色の釉薬を施していたと考えられるが、釉薬の状態が悪く白色を呈している。胎土は赤褐色を呈する。

近世の遺物は、土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付がある。土師器には皿（4～13)・蓋(14)・用途不明土器（15）がある。皿には口径5cm前後の手づくねの小皿（4～7）と口径10cm前後で底部に圏線が明瞭につく皿（8～13）がある。胎土は小皿が黄橙色を呈し、皿は灰白色を呈する。13の表面には釉薬が施されている。14は塩壺の蓋である。胎土は黄橙色を呈する。15は扁平の宝珠形を呈する。上下を別々に形作り、貼り合わせる。内部は中空である。貼り合わせた後、底部に径2mmのひご状工具で孔を穿つ。上部内面に穿孔時の粘土屑が付着する。

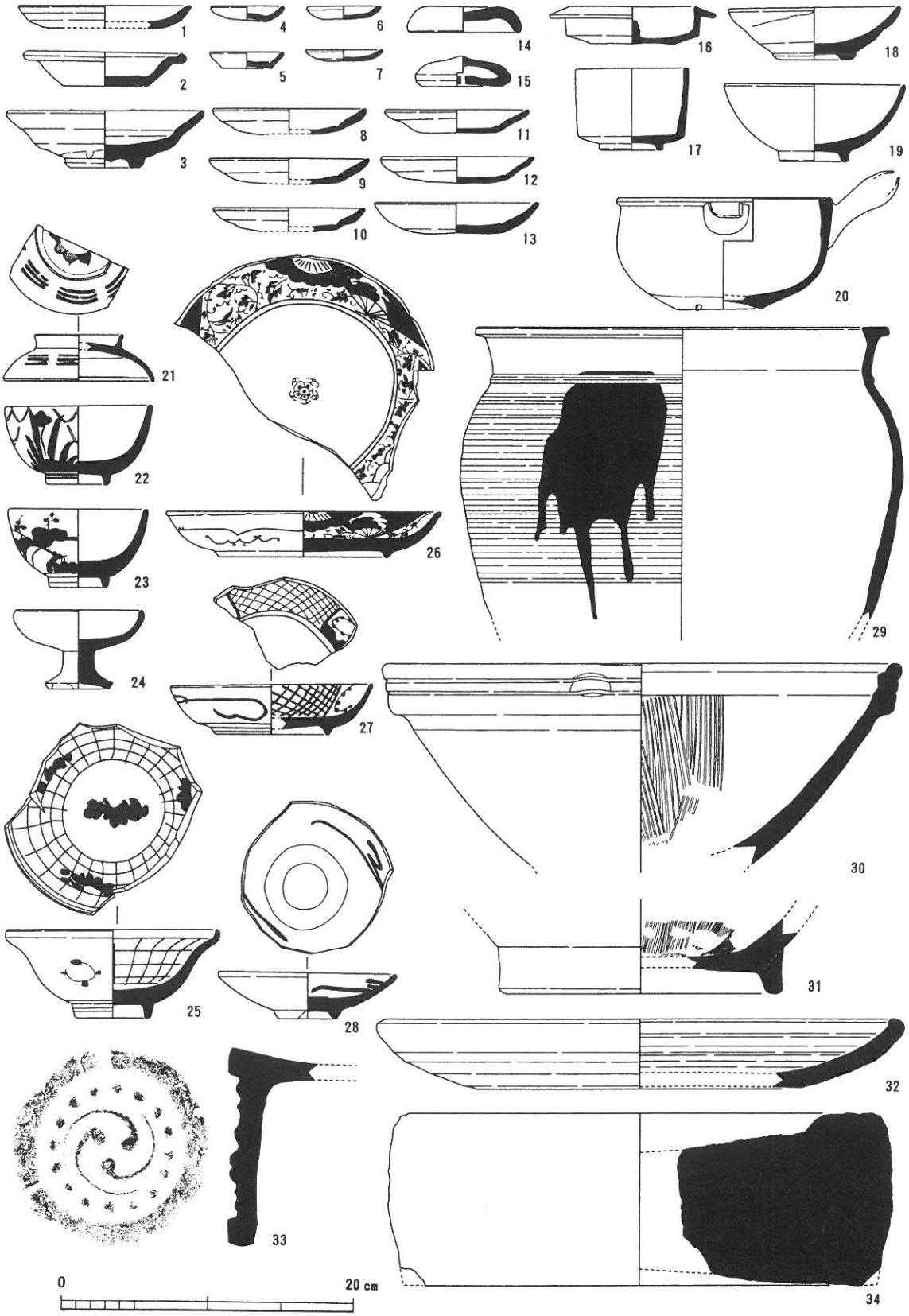
施釉陶器には椀(19)・筒形椀(17)・皿(18)・蓋(16)・行平鍋(20)がある。椀・筒形椀は黄白色を呈する軟質の胎土で、黄色がかる透明釉を施す。皿(18)は、赤褐色を呈する。灰色の釉薬が施されている。蓋(16)は土瓶の蓋である。淡緑色の釉薬を表面に施す。行平鍋(20)は、濃緑色の釉薬を施す。口縁部、底部、体部下方は露胎である。底部に小さな脚を貼り付ける。

焼締陶器は、すり鉢（30・31）・鉢(32)がある。すり鉢は口縁部に2条の凹線があり、擂目は8～10本単位で隙間なく施されている。31は高台の貼り付けられた底部である。図示した擂鉢は、いずれも信楽焼である。備前焼の擂鉢も1個体あり、写真で示した(35)。32は備前焼の鉢である。口径35cm、器高5cmの盤のような形態をとる。胎土は暗赤褐色を呈し、堅く焼き締まる。29は信楽焼の壺である。全体に茶色の釉薬を施し、黒色の釉薬を2ヶ所に施す。胎土は灰白色を呈し、堅く焼き締まっている。

染付は椀（22・23）・蓋(21)・鉢(25)・皿(26～28)・仏飯椀(24)がある。椀(22・23)は「くらわんか椀」と呼ばれる椀である。いずれも体部に草文が描かれている。21は椀の蓋である。器壁は薄く、小振りの蓋である。皿は口縁に輪花を施す皿(26)とやや小振りの皿がある。いずれも底部が厚く、体部は湾曲し上方に立ち上がる。低い高台が削り出される。26は内面に扇と草文、外面に草文が描かれる。27には幾何学文と草文が描かれる。鉢(25)は、湾曲して立ち上がる体部を持つ。口縁端部は上方に屈曲して立ち上がる。文様は幾何学文と草文の組合せである。仏飯椀(24)は緑がかる透明釉を施す。底部外面は無釉である。

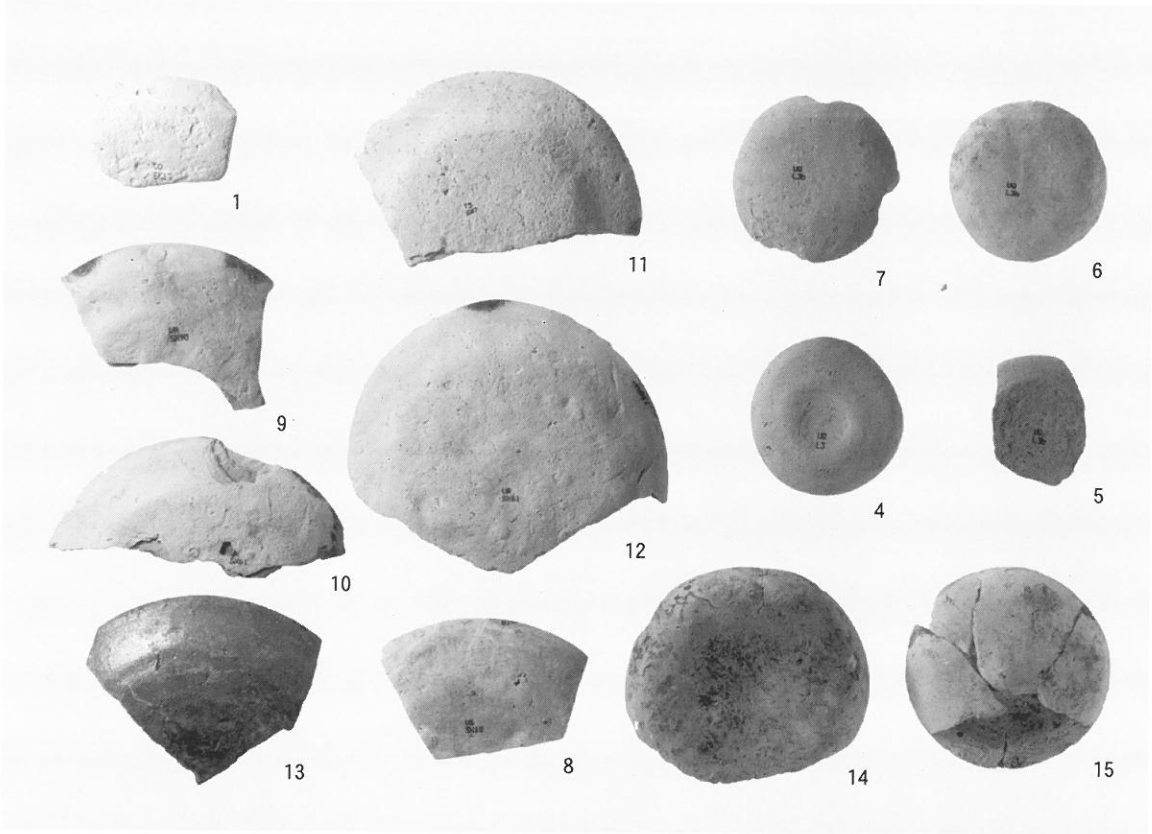
33は巴文軒丸瓦である。近世のものである。

34は花崗岩製の石臼である。

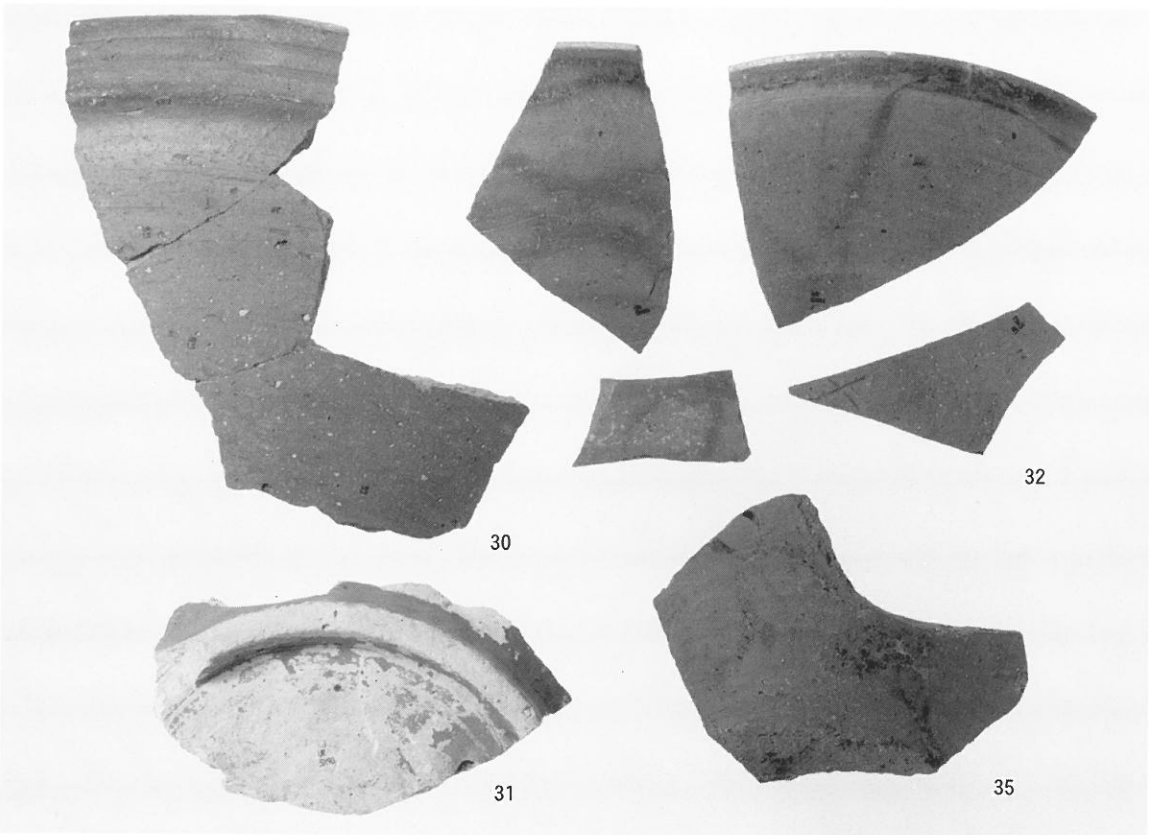


第19図　出土遺物実測図

第20図　施釉陶器・染付・瓦



第21図　土師器

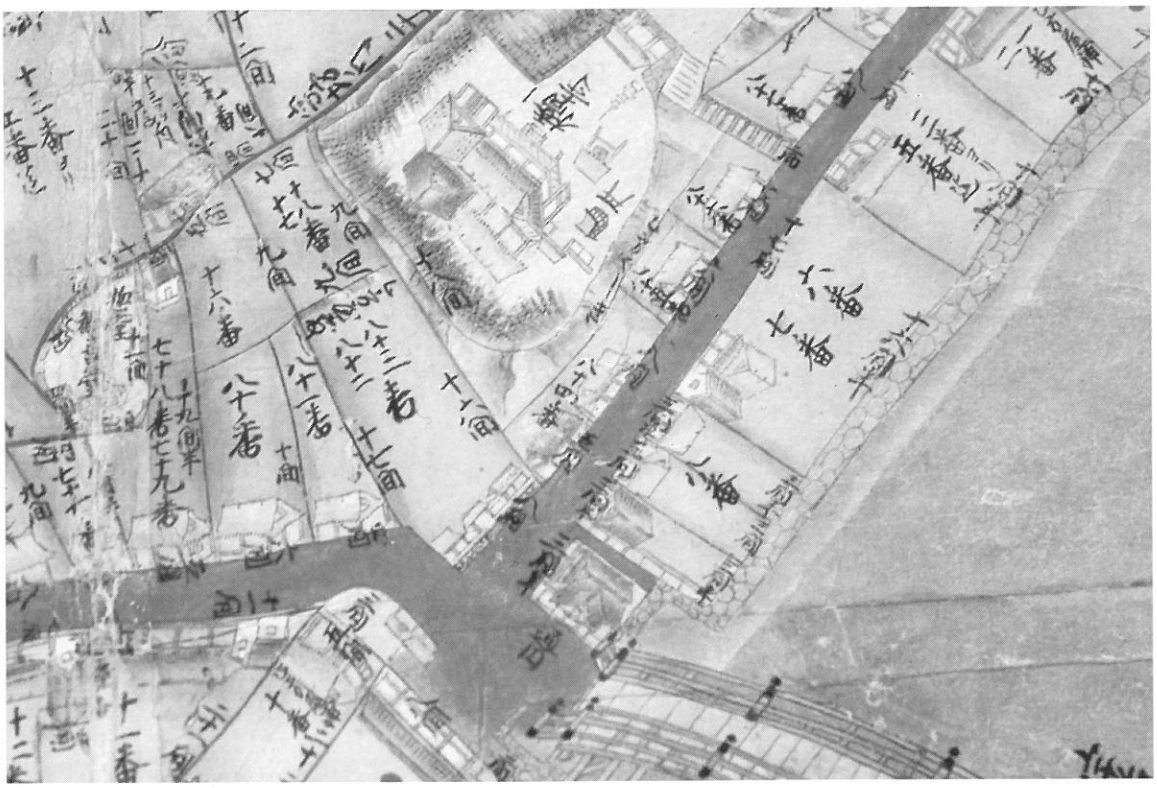


第22図　焼締陶器

4．まとめ

今回の調査では、近世から近代に継続する茶屋の跡を検出した。橋に面した調査地西側は店、溝に区画された東側は居住域もしくは茶の製造などに利用されたものと考えられる。近世の遺構では、井戸などの他はどの様な性格を持つものか判断できないものが多いが、近代においては焙炉と思われる遺構が、井戸を中心に放射状に据えられ、小規模な茶製造の状況が看取できる。

茶屋以外の遺構としては、当初予想された宇治橋、もしくは橋寺に関連する遺構は検出しなかった。そして検出した遺構の大部分は江戸時代後期以降のものと考えている。しかし少量ではあるが鎌倉期及び桃山期の遺物が出土しており、特に桃山期の遺物が一定量あることは注意すべきであろう。本調査地における段丘の削平が、江戸時代前期の『宇治郷総絵図』にも見えることから考えると、桃山時代にはすでに行われていた可能性が考えられ、さらに桃山期の明確な遺構を検出しなかったことから、江戸時代を通して土地の改変が行われていたものと思われる。



第23図　宇治郷総絵図にみる調査地付近

Ⅱ．菟道遺跡（大垣内４他）発掘調査報告

１．はじめに

本報告は、宇治市菟道大垣内４番地他で実施した、有限会社ネット不動産販売による宅地造成工事に伴う菟道遺跡発掘調査報告である。

菟道遺跡は菟道藪里・西中・大垣内等の菟道地区一帯に広がる遺跡で、宇治川谷口部右岸の、地形的には扇状地性地形を中心に比較的まとまった小空間である。古代ウジ地域の拠点集落と中世集落とが重複する遺跡で、旧国郡制では山城国宇治郡宇治郷にあたる。二子山古墳、池山古墳、大鳳寺跡等、宇治地域では遺跡密度の濃い地域の一つである。

２．調査の経過

平成15年４月28日付けで、有限会社ネット不動産販売株式会社より菟道大垣内4番地他における埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である菟道遺跡の範囲内であり、大規模な宅地造成であったことから発掘調査の指導を行う必要があった。

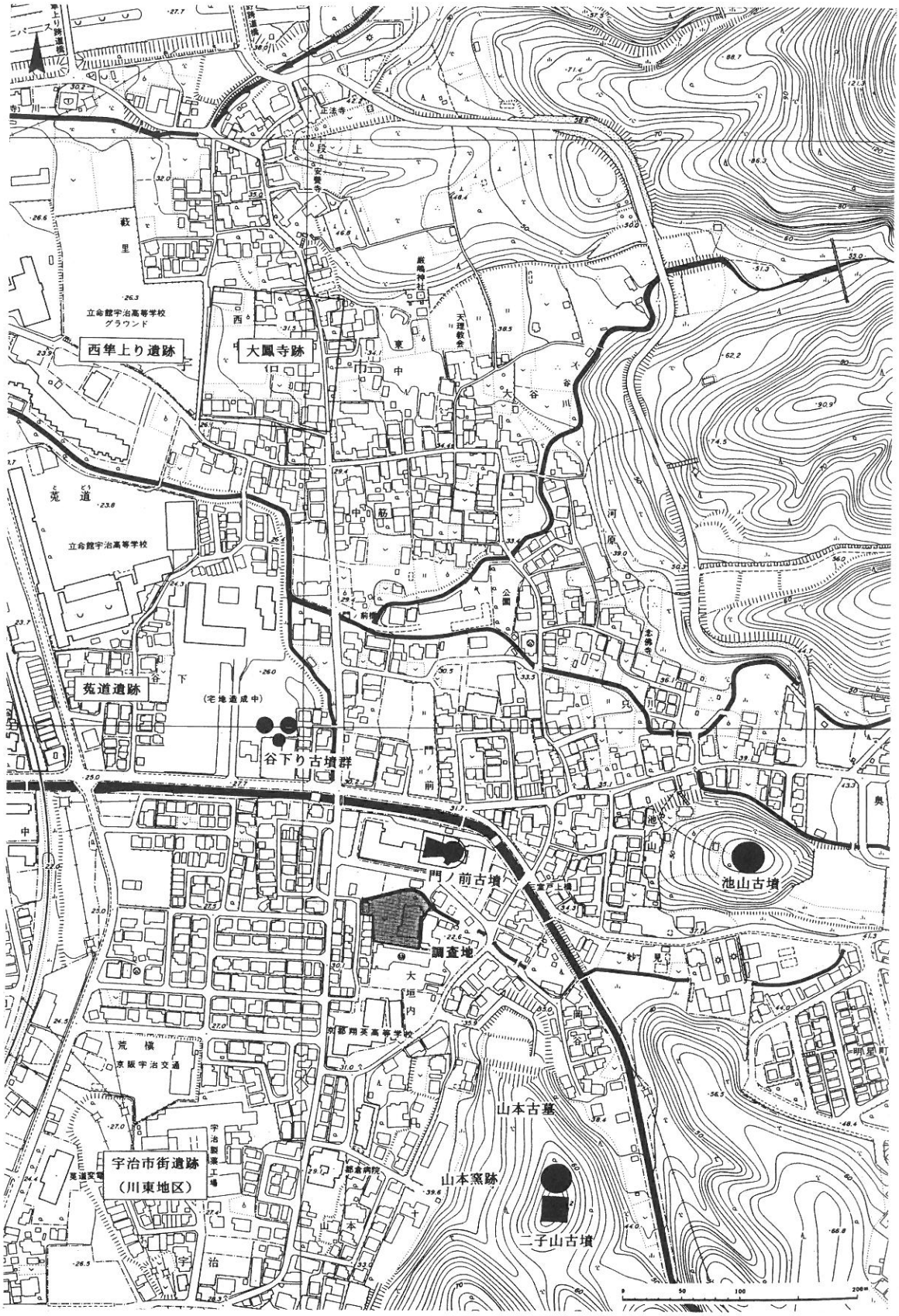
開発予定地は、南北約30m，東西約60m，面積1，739平方mを測る東西に細長い敷地である。開発計画は、ここに分譲住宅に伴う宅地造成をしようとするもので、敷地内の中央をほぼ東西に走る道路を設置し、道路に面して分譲住宅を建設しようとするものであった。

住宅部分については土木工事が現状を大きく掘削する計画でないことから諸種の施設が埋設される宅地内道路を緊急発掘調査の対象地とし、業者と協議した。西端部は、敷地内の唯一の進入部にあたり、その地点の調査については調査を進めて行く中で検討することとした。

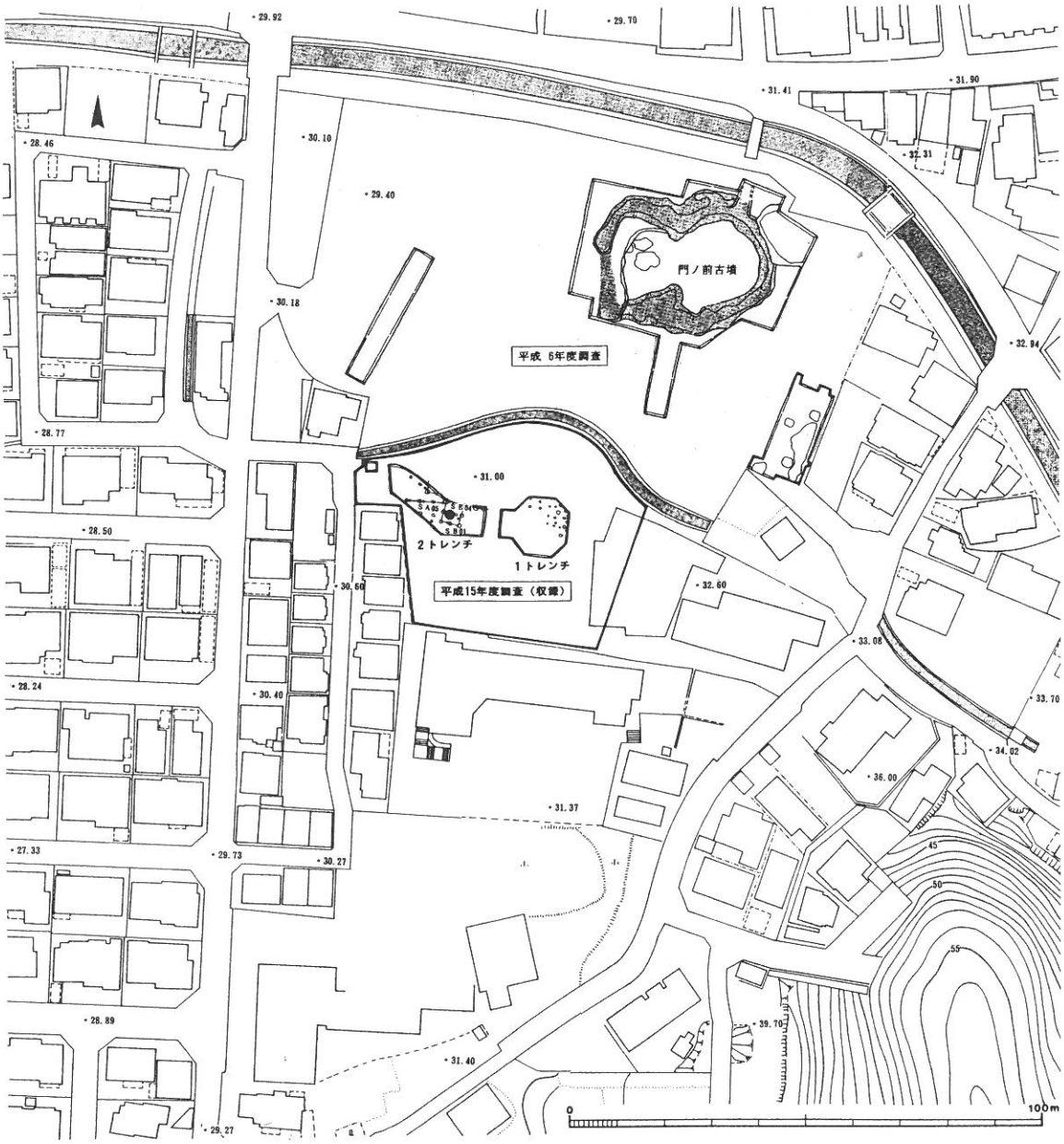
発掘調査は、平成15年６月30日に開始した。調査は、まず表土排除を機械力（重機）で調査地奥にあたる東端から開始した。表土を排除し土層の確認を行う中で、まず水田（耕作土床土）層が確認され、その直下で遺構と判断される柱穴状のものが確認された。このため床土部分まで重機掘削を行い、それ以降は人力掘削とした。排土は場内仮置きとした。

調査地中央を南北に貫通する排水施設があり、その部分を残す形でトレンチ設定した。このためトレンチは２つに分かれ、東側を１トレンチ、西側を２トレンチとした。

第24図　発掘調査前（西から）



第25図　調査地の位置と周辺の地形



第26図　トレンチ配置図

1トレンチでは北東部で比較的まとまって数多くの柱穴が検出された。2トレンチではほぼ全体に遺構が確認され、特に中央部で顕著に確認された。これらの遺構の状況から、遺構密度の濃い2トレンチより調査を進めていった。井戸ＳＥ04から遺物が集中して出土したためこの遺構を中心に全体遺構の状況把握を行った。

遺構の全体が完掘状況に入ってから、全体の写真撮影・平面図実測等の記録作成を行い、平成15年8月8日に発掘調査を終了した。

3．検出遺構

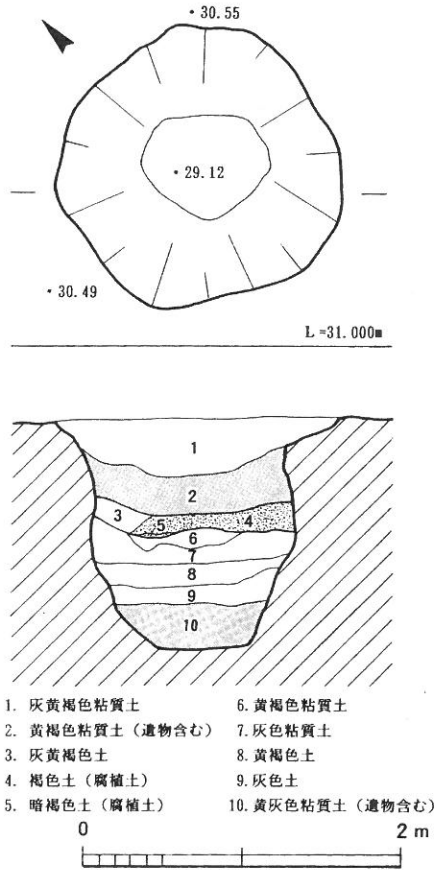
今回の発掘調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物・井戸・柵列・柱穴等である。以下順に遺構の概要を述べる。

A．2トレンチの遺構

掘立柱建物ＳＢ01　トレンチほぼ中央で検出した。桁行２間(4.1m)以上、梁間２間(3.8m)の南北棟の建物である。建物内の南西寄りに後述する井戸ＳＥ04が検出された。掘方は心々間で1.9～2.2mとややばらつきがみられる。掘方は方形で直径0.7～0.8m、深さ0.3mである。柱穴は掘方より一段下げて掘削されており、輪郭は３カ所で確認できた。円形で直径約20cmである。また埋土の状況から柱の抜き取り痕跡が１カ所確認できた。埋土は灰色土で概ね単一層である。

掘立柱建物ＳＢ02　トレンチ北東端で検出した。調査地内にわずかにかかり全容不明。掘方は方形で直径約１ｍとＳＢ01よりやや大きい。埋土は黒褐色土。

掘立柱建物ＳＢ03　トレンチ北西部で検出した。調査地内にわずかにかかり全容不明。掘方は方形で直径0.9mとＳＢ02とほぼ同一規模である。埋土は黒褐色土で、掘方規模・建物方位等からＳＢ02と同時期の可能性が高い。

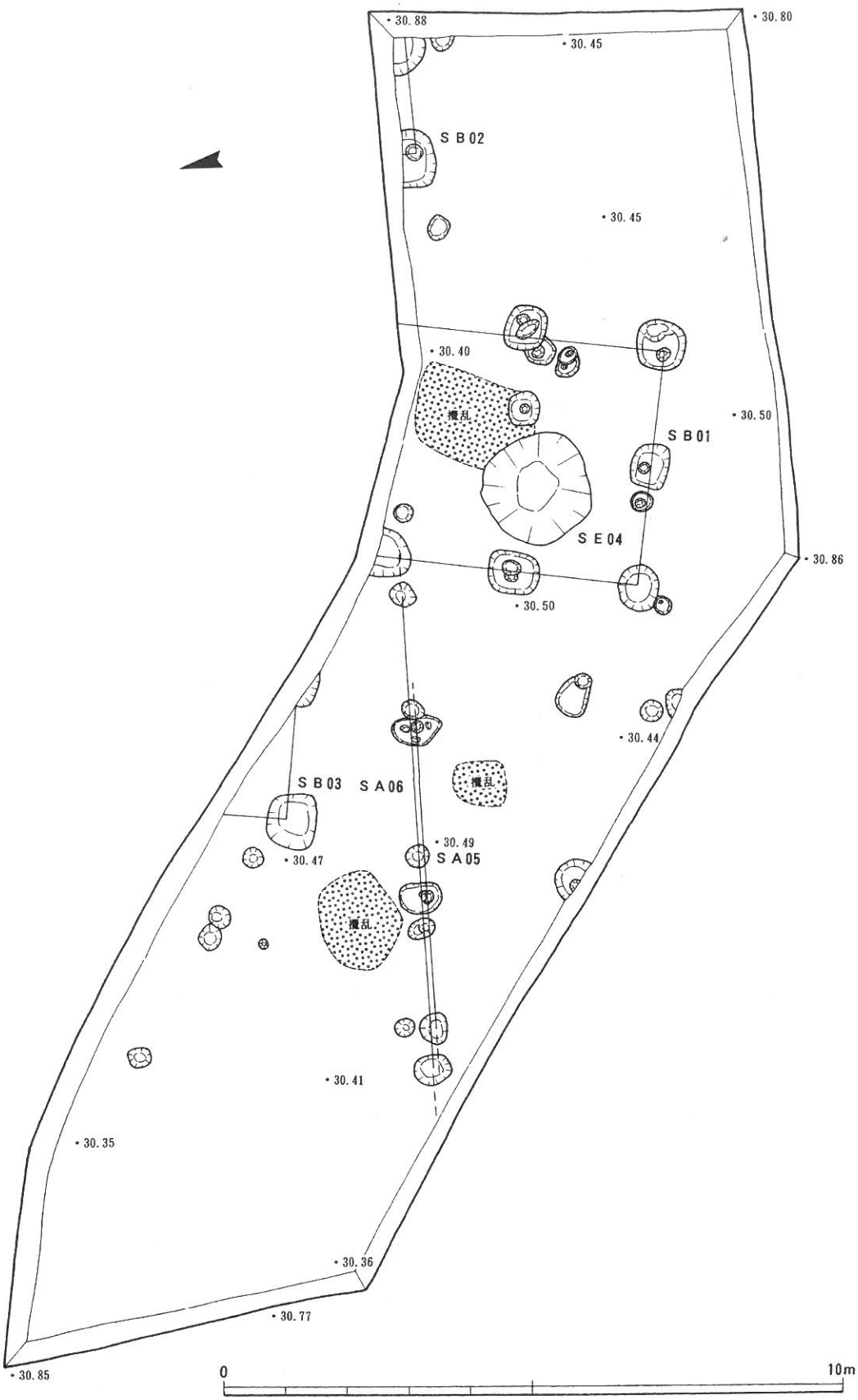


第27図　井戸SE04実測図

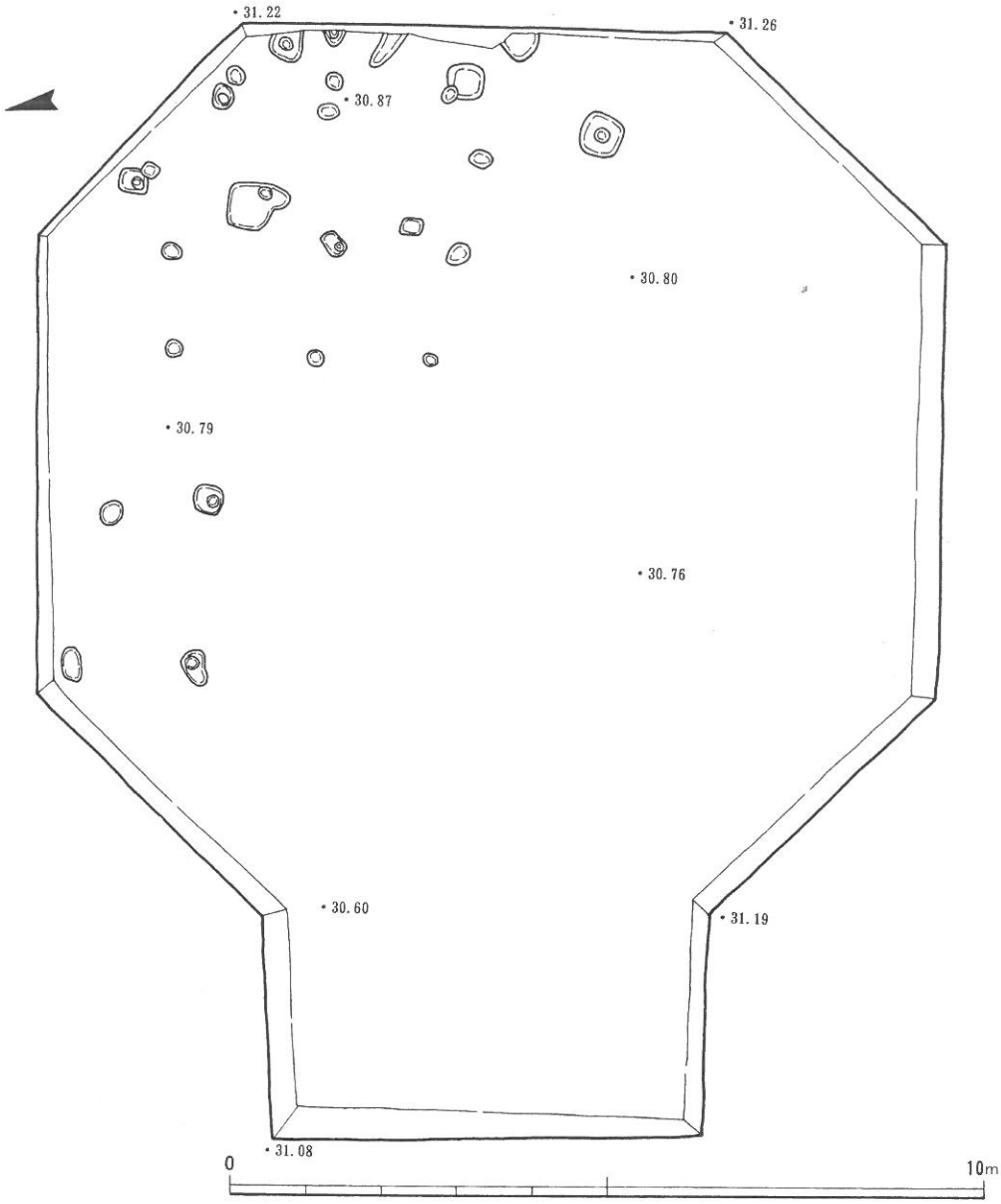
井戸ＳＥ04　ＳＢ01内の南西よりで検出された。現存で深さ約1.5mを測る。掘方は概ね円形で直径約1.5mを測る。井戸枠はすでに抜き取られたためか遺存していなかった。土層は８層に分別され、遺物は黄褐色粘質土層と黄灰色粘質土層の上下２層に完全に分かれて出土する。これらの出土遺物はいずれも８世紀中頃に比定される。埋土は下層部はグライ化して青灰色系に土色変化し、本来の土色が不明である。なお最下層で土器とともに形状不明の木製品片、シダ科の植物遺存体、種実等が出土した。

柵列ＳＡ05　トレンチ西側で検出された。東西方向に並ぶ柵列。柱穴間は西から順に2.8m、2.1mを測る。いずれも掘方をもち、柱穴の周囲には根巻き石のような小石３個が配されている。柱穴は20cmを測る。

柵列ＳＡ06　トレンチ西側で検出された。東西方向に並ぶ柵列。柱穴間はばらつきがみられ、西から



第28図　2トレンチ平面実測図



第29図　1トレンチ平面実測図

順に1.8m、2.3m、1.2m、2.2mを測る。ＳＡ05と近接し、またほぼ同一並行にあること等から、先後2時期にわたる遺構と把握される。掘方はなく柱穴は30～40cmを測る。

Ｂ．１トレンチの遺構

トレンチ北東部で、集中する柱穴群を検出した。掘立柱建物や柵列の存在が伺えたものの、柱筋の並びは確認することができなかった。

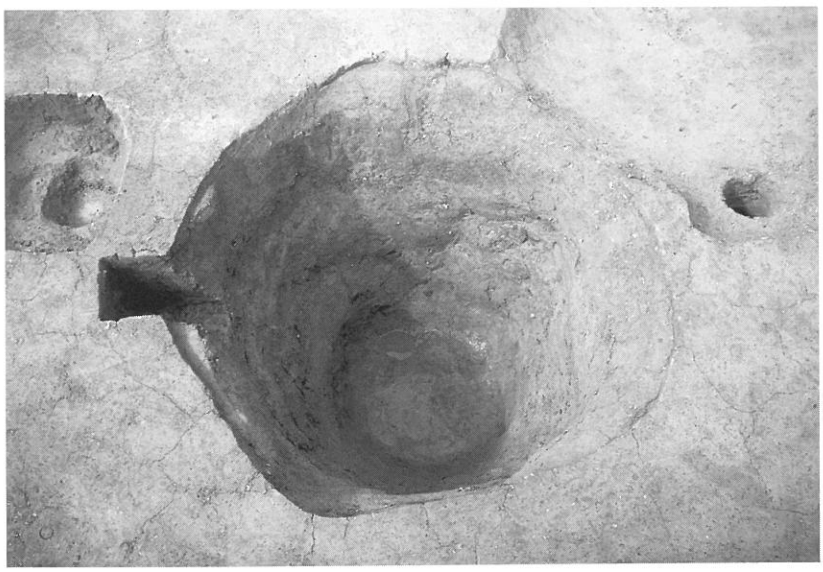
第30図　調査トレンチ全景（西から）

第31図　2トレンチ全景（西から・西拡張前）

第32図　掘立柱建物SB01・井戸SE04（北から）

第33図　井戸SE04上層遺物出土状況（北から）

第34図　井戸SE04下層遺物出土状況(北東から)



第35図　井戸SE04完掘状況（南西から）

第36図　1トレンチ全景（西から）

第37図　1トレンチ東部 柱穴検出状況（南西から）

4．出土遺物

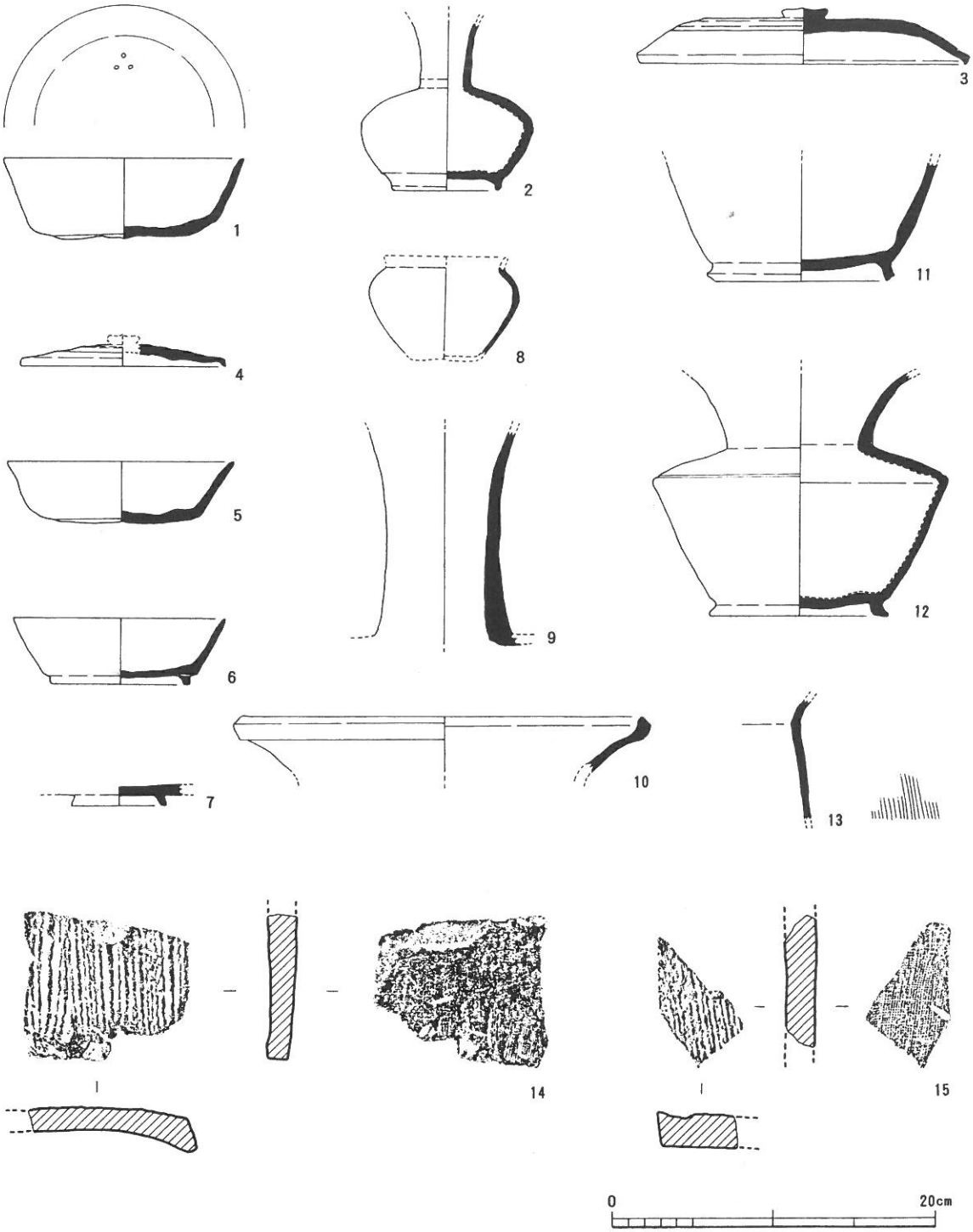
今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱で2箱分と少量である。種類は須恵器・土師器・黒色土器・木製品等であり、大半が須恵器である。時代的には奈良時代が主で、わずかに平安時代のものを含む。そのうち実測できた遺物は、ＳＥ04出土の遺物だけである。以下、それらの遺物の概要を述べていく。

ＳＥ04出土遺物（第38～40図）

遺物は灰色粘質土層（下層）と灰黄褐色土層（上層）の2層に完全に分別される。

下層（1～3）　1は杯Ａで、完存。底部内面隅に円形の小刺突痕が近接して3つ穿たれ、それぞれを結ぶと三角形状をなす。灰褐色。焼成は堅緻。胎土は緻密。口径14.6cm、器高5.0cmを測る。2は壺Ｍ。口縁部が欠損する。丸みを帯びた体部に、頸部はやや外方向に開く。貼り付け高台。青灰色。焼成は堅緻。胎土は緻密。高台径6cmを測る。3は杯Ｂ蓋。つまみは偏平で中央がやや突出するタイプ。灰白色。焼成は堅緻。胎土に長石を多く含む。口径20.4cm、器高 3.4cmを測る。その他、形状不明の木製品、シダ植物等の植物遺存体がある。

上層（4～15）　4～12が須恵器、13が土師器、14･15が瓦である。4は杯Ｂ蓋。つまみは欠損し不明。灰褐色。焼成は堅緻。胎土に長石を多く含む。口径13.0cmを測る。5は杯Ａ。体部がほぼ直線的に外方向に立ち上がる。口縁部から底部内外面にかけての全体のほぼ半分に煤が付着する。灰白色。焼成はやや軟質。胎土は緻密。口径14.0cm、器高8cmを測る。6は杯Ｂ。体部は内湾気味に立ち上がる。貼り付け高台。青灰色。焼成は良好である。胎土は緻密。口径13.1cm、器高4.1cmを測る。7は底部のみだが皿Ｂと思われる。貼り付け高台。灰色。焼成は堅緻である。胎土は緻密。8は壺Ｃ。体部上半部に最大径がくる。丸みを帯びた小壺である。広口の短頸部であろう。高台の有無は不明。灰白色。焼成は軟質。胎土に雲母を含む。最大径9.2cmを測る。9は壺Ｋ。頸部である。青灰色。焼成は堅緻。胎土はきめ細かい。10は甕Ａ。口縁部である。口縁端部は外傾した面を有する。外面に緑灰色の自然釉が付着する。青灰色。焼成は堅緻。胎土はやや粗い。口径は24.8cmを測る。11は壺Ｑ。体部上半部を欠損する。外方向に開く高台をもつ。体部外面下半はヘラ削りをし、丁寧に仕上げている。外面が暗青灰色、内面が青灰色。焼成は堅緻。胎土に角閃石を含む。高台径は10.6cm、残存高は 7.5cmを測る。12も壺Ｑ。口縁部は欠損する。肩の張る体部に外反する頸部と高台をもつ。肩部に一本の沈線を施す。体部外面下半はヘラ削りをする。青灰色。焼成は堅緻。胎土は長石を多く含む。口径は10.7cm、器高は15.2cmを測る。13は甕Ａ。頸部片で長胴甕と考えられる。外面には縦方向のハケメが入る。淡赤褐色。焼成は軟質。14・15は平瓦。凸面に縦位の縄叩きを施し、凹面に布目痕を残す。14は青灰色、焼成はやや硬質。厚さは1.7cmを測る。15は灰白色、焼成は軟質。胎土に砂粒を多く含む。厚さは2.0cmを測る。



第38図　出土遺物実測図

これら２層のいずれもが平城Ⅲ期に比定され、今のところ時期差は認めがたい。

なおＳＥ04以外には細片で黒色土器・土師器・須恵器杯蓋片等が出土している。

第39図　井戸SE04上層遺物

第40図　SE04下層遺物

5．まとめ

以上、今回の発掘調査成果の概要を述べてきた。

菟道遺跡は、これまでの発掘成果からも古代「ウジ」の中心集落が存在することは間違いない。今回発掘調査した地点は、菟道遺跡南東端の丘陵裾部にあたり地形的にみて集落の中心域からはおそらく外れたところに位置すると考えられる。出土遺物はわずかに平安時代の遺物も含むも、基本的には奈良時代を主とするものであり、検出遺構は概ね奈良時代のものとみて間違いないだろう。これまでの菟道遺跡における発掘調査では、古墳時代から中世期にわたる各時期の遺構が重複して検出されている。今回はほぼ奈良時代といっても過言ではない遺構の状態であった。前代とは異なり奈良時代では広範囲な空間利用が菟道地域であったことを伺い知ることができるも、今だ面的にみれば、遺跡の情報量は乏しく、この地域の歴史的変遷を描くには今後のさらなる資料の蓄積が必要であろう。

今回の検出した遺構として唯一時期が限定できたのは、井戸ＳＥ01である。出土遺物から８世紀中頃に比定される。そしてこの井戸を取り囲むように掘立柱建物ＳＢ01が立つ。時期は出土遺物から判断しがたいが、仮に同時期とすれば、この井戸の特異な性格を指摘することができよう。今後の検討課題としておきたい。

菟道地域は、宇治市内において地元郷土愛の極めて強い地域の一つである。地域の人々が身近なこれらの文化財に触れ、心豊かで暮らしやすい地域に今後とも発展していくことを希望したい。

【参考文献】

「菟道遺跡発掘調査報告書」『宇治市文化財調査報告』第５冊　宇治市教育委員会

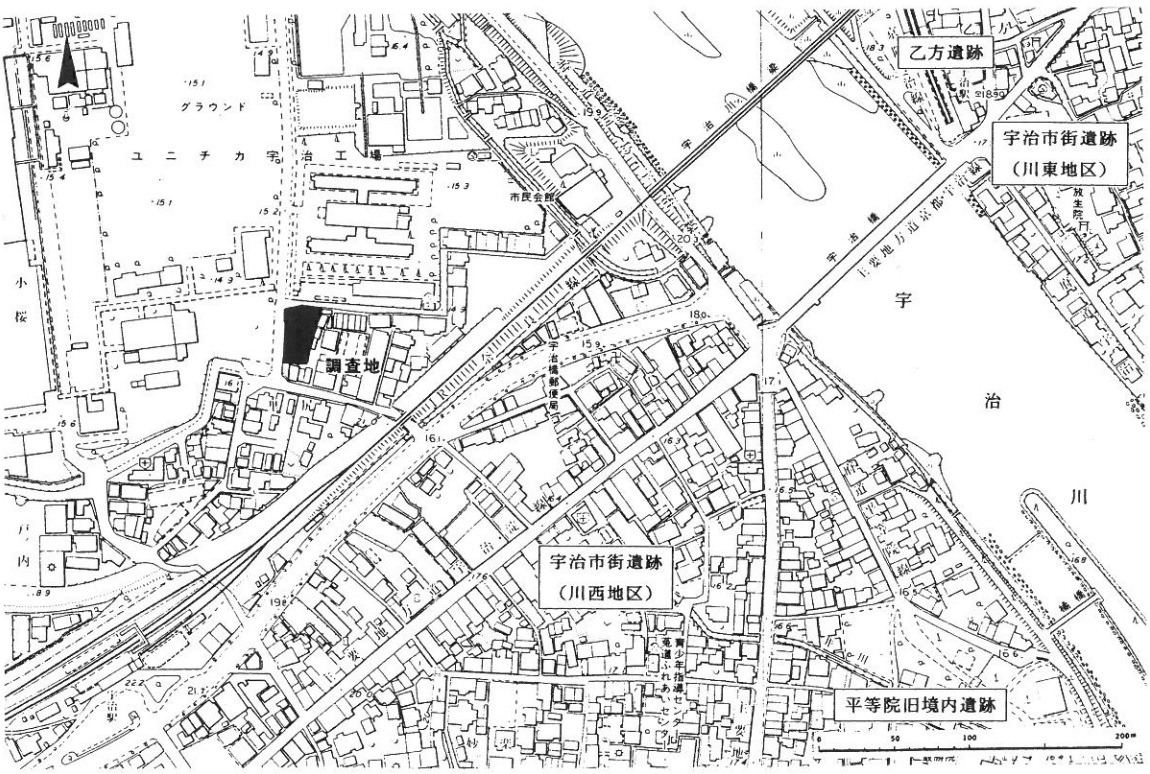
Ⅲ．宇治市街遺跡（里尻29-8）発掘調査報告

1．はじめに

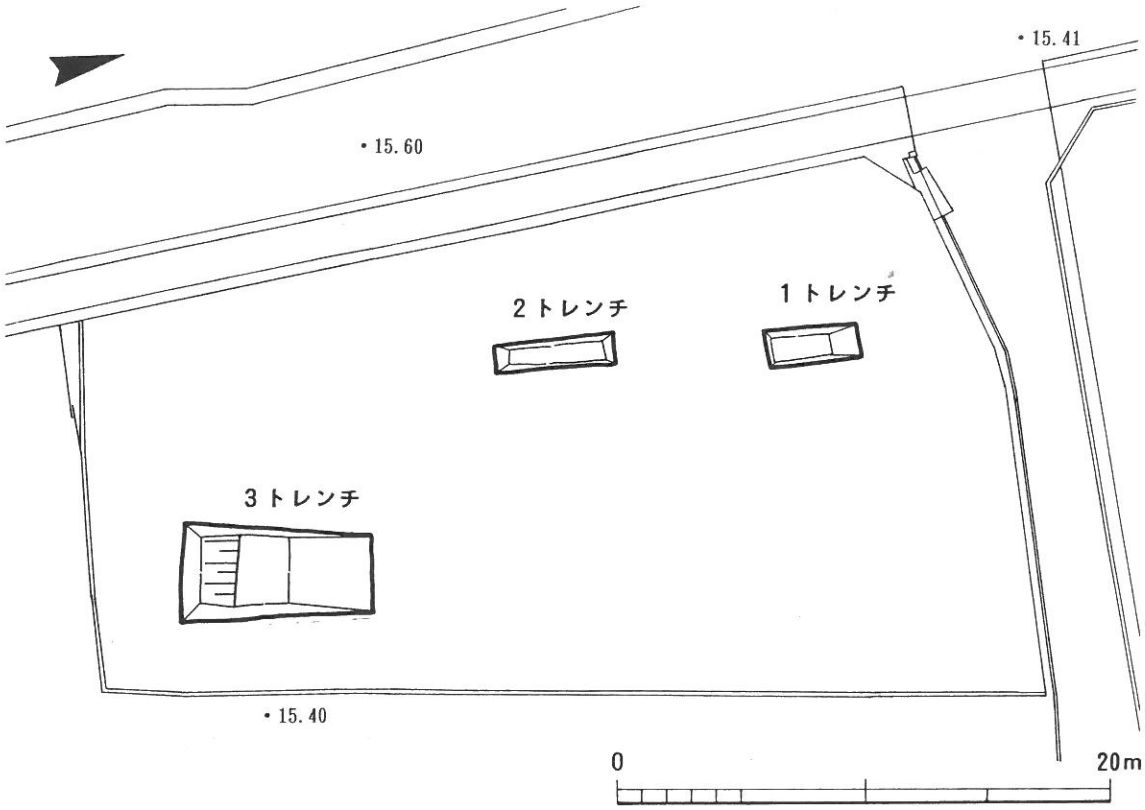
本報告は、宇治市宇治里尻29-8で実施した、株式会社タカスギグローバルマンションによる共同住宅建設に伴う宇治市街遺跡の発掘調査概要である。調査は平成14年５月15日と16日の２日間実施し、調査面積は39㎡である。

2．調査の概要

本調査地は、宇治市街遺跡として周知している埋蔵文化財包蔵地の北端にあたり、宇治川氾濫原と扇状地との境にあたるものと思われた。このため遺構の有無を確認する調査が必要となったが、原因者が、遺構があった場合は基礎掘削の深度を設計変更するという意向であったため、調査地北半部の既存建物の解体が終了した段階で１・２トレンチの調査を行った。その結果基礎掘削の予定深度まで掘削を行い、表土近くで遺物を包含する層を検出したが、遺構は検出しなかったため、その日に１・２トレンチの調査を終了した。３トレンチは既存建物の解体がすべて終了した段階で調査を実施した。３トレンチでは、トレンチ南端で地表下約1.5mで南に向かって傾斜する落ち込みを検出した。この落ち込みは赤褐色砂を地山とし、暗青灰色砂を埋土とする。埋土には土師器片などの土器や瓦を多量に含んでおり、溝な



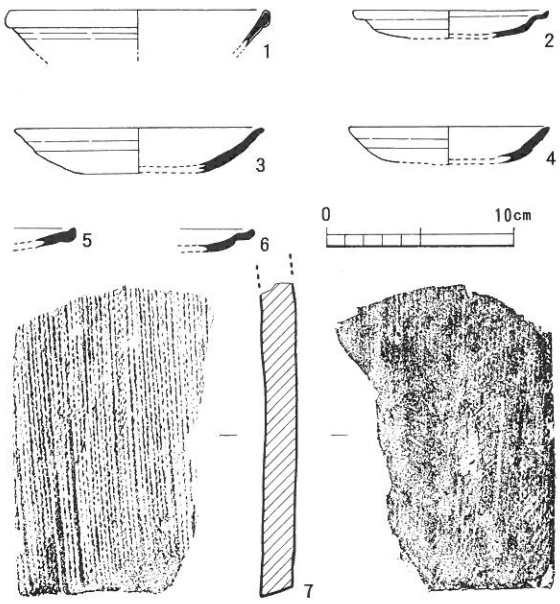
第41図　調査地の位置



第42図　トレンチ配置図

どの遺構と考えられる。

出土した遺物には、白磁・土師器・須恵器・瓦器・瓦がある。時期は11世紀から12世紀のものである。



第43図　出土遺物実測図

3．まとめ

今回の調査で検出した遺構は、溝状遺構のみであった。しかし宇治川氾濫原に近い低地部で平安時代の遺構を検出したことは重要である。平成７年度に実施した宇治妙楽169や平成13年度の矢落遺跡など、近年折居川扇状地の扇端部で平安時代の遺構が検出される例が増えてきている。これらは藤原氏の別業群との関連が考えられ、別業内の池に扇端部の湧水を入れるためにこのような低地に遺跡が成立しているものと思われる。今回の調査は、藤原氏の別業を考える上で大きな手がかりになるものと思われる。

Ⅳ．若林遺跡（若林16-15）立会調査報告

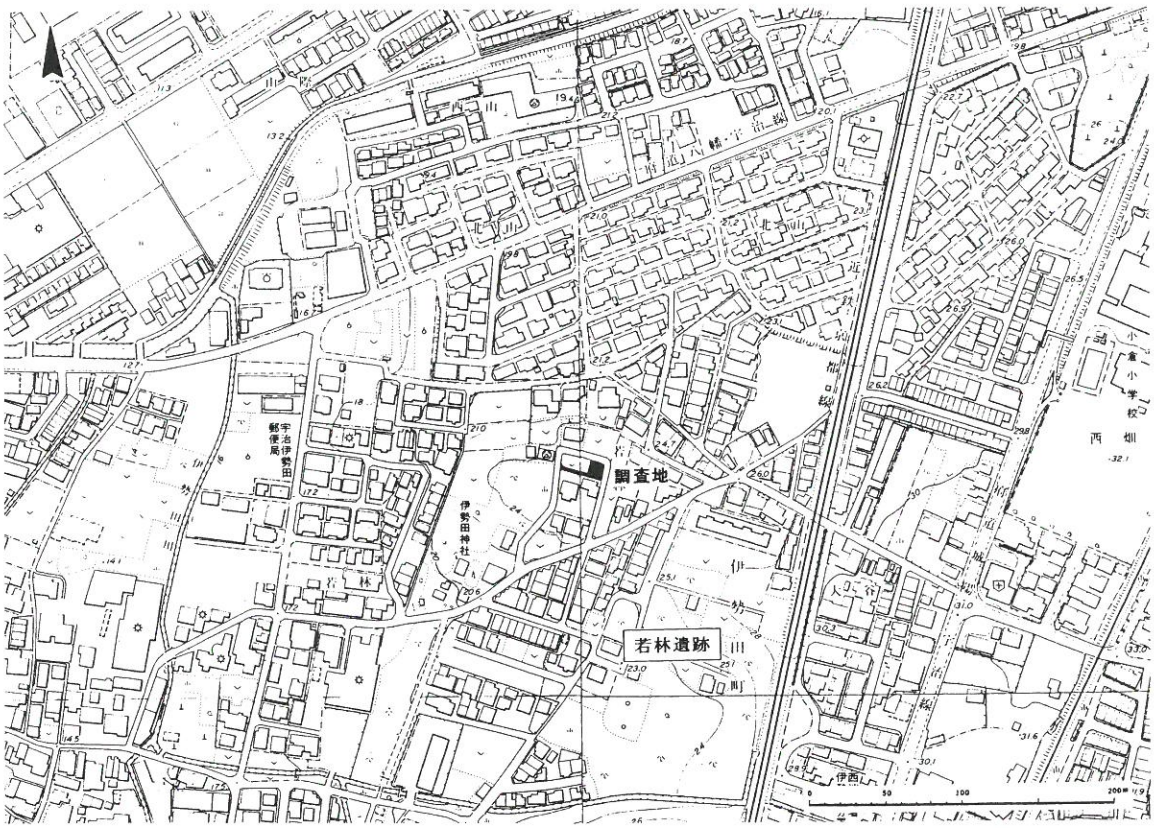
1．調査の概要

本報告は、伊勢田町若林16-15番地において個人住宅建設に伴い実施した立会調査の成果である。平成14年５月22日に実施した。

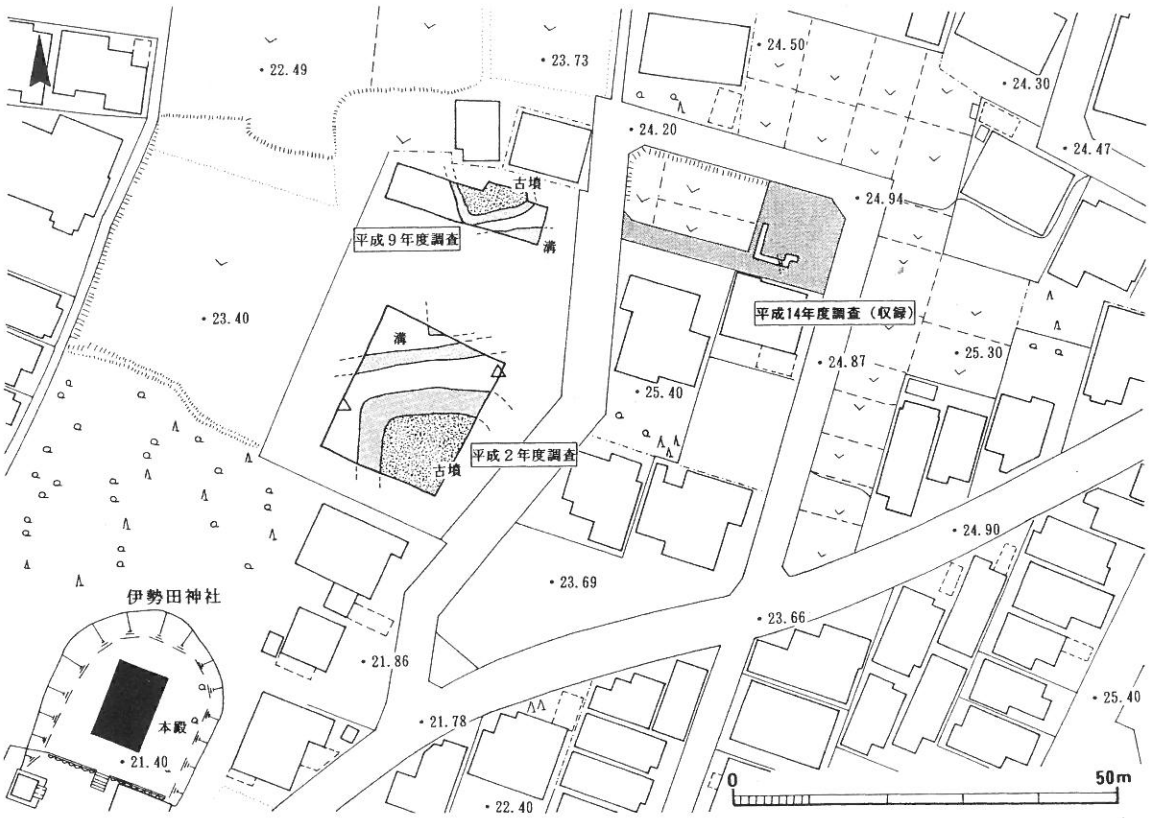
建物の基礎掘削部分を立会調査した。重機により基礎部分の掘削を開始し、表土の灰褐色土層を除去すると、西部では地表面から約25cm下で赤褐色の地山層が検出された。東部ではその同一面上で暗赤褐色土が検出された。この層位は、これまでの若林遺跡の発掘調査状況からみて、遺構の埋土である可能性が考えられた。東部は、西部より掘削が深く、埋土想定の暗赤褐色土を掘り下げていくと地表面から約50cm下で前述の赤褐色の地山層が検出された。この暗褐色土層中から３点の須恵器が出土した。調査地南側ほぼ中央で、西から東に地山が急激に落ち込む状況が確認された。小規模面積のため、定かにはできないが、出土遺物・周辺地形・従前の調査状況から古墳周濠の肩部が一部検出されたものと理解した。

2．出土遺物

古墳時代の須恵器片３点が出土した。１は杯蓋で、全体的に丸みを有する。天井部には回

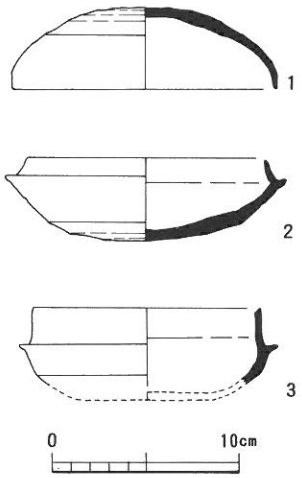


第44図　調査地の位置



第45図　トレンチ配置図

転ヘラケズリが施される。口径14.0cm、器高4.3cmを測る。色調は青灰色である。２は杯身で、口縁部の立ち上がりは短く、底部には回転ヘラケズリが施される。口径12.6cm、器高4.4cmを測る。色調は青灰色である。３は杯身で、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。底部には回転ヘラケズリが施される。口径推定12.1cm、器高は不明である。色調は暗青灰色である。焼成はいずれも良好である。形態的に大阪の陶邑出土例と比較すると１はＴＫ43、２はＴＫ43かＴＫ209，３はＴＫ23にそれぞれ類似し、年代的には５世紀末から６紀後半に比定される。



第46図　出土須恵器実測図

３．まとめ

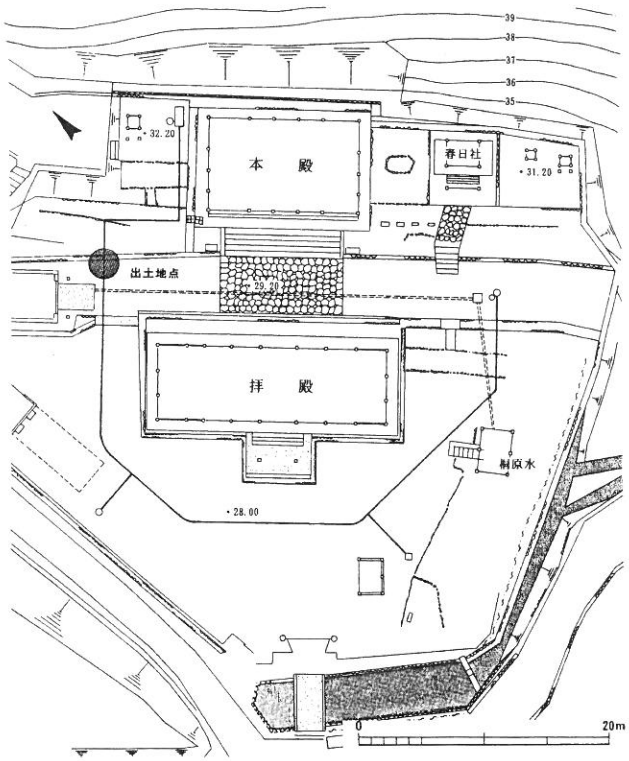
今回の立会調査成果をこれまでの調査成果と照合・整理すると、古墳が周囲に数多く点在する状況が看取される。主体部はほとんど遺存していないであろう。今回の調査地と同一丘陵の端部で、これまでに平成２年度（１次調査）と平成９年度（６次調査）の２回発掘調査を実施しており、いずれも６世紀代の古墳を検出している。今後の周囲の調査が期待される。

V．宇治上神社遺跡（山田59）立会調査報告

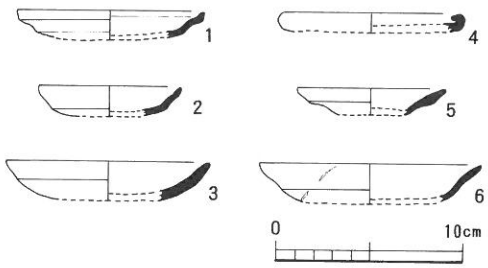
1．調査の概要

宇治上神社では、平成14年度に防災施設工事を行うこととなった。宇治上神社境内は、世界遺産に登録された際に、国宝宇治上神社本殿の付けたり指定となっているため、境内地の埋蔵文化財の取り扱いについて京都府教育委員会と協議を行った。その中で、建造物の付けたり指定の場合、掘削工事に伴う現状変更等の手続きを行っている例はないとのことであった。しかしこの見解からすると、文化財保護法上の規制をまったく受けないことになるため、京都府教育委員会文化財保護課建造物係・記念物係との協議の結果、宇治上神社遺跡として文化財保護法第57条の２の届出を提出してもらうこととし、平成14年11月18日付けで提出された。

宇治上神社の建物の配置は、軸を北東－南西にとっているが、ここでは東西方向に並ぶものとして記述を進めていく。工事は、大部分が既設の埋管部分の掘削であり、新規に掘削するのは、拝殿の前面および拝殿・本殿の北側であった。拝殿前面では、暗灰色砂質土の盛土の下に①炭を含む赤褐色土層、②灰褐色シルト層の堆積であり、遺構・遺物ともに認められなかった。①の炭層は、拝殿前面の中でも北側に多く見られ、南側ではあまり見られなくなる。神社の建物は本殿のある段を最高所とし本殿と拝殿の間に一段、拝殿、拝殿前面と四段の雛壇になっており、このうち本殿と拝殿の間と拝殿前面は平坦であるが、本殿と拝殿の段は傾斜を持っている。今回の工事で最も深く掘削を行ったのは、本殿と拝殿の間の段であるが、ここでは1.5m以上の暗茶褐色土の単一層に見え、この土層中に土師器片が多く含まれていた。これらのことからこの土層は造成した層の可能性が高いものと思われる。本殿の建つ段では石垣の裏込めからも土器が出土しているが、基本的には岩盤となっている。また本殿・拝殿の南側にあた



第47図　土師器出土地点



第48図　出土土師器実測図

る春日社前では大量の湧水が見られた。

出土した遺物は土師器の皿のみである。12世紀から15世紀までの時間幅を持つものが出土している。

2．まとめ

今回の調査は立会調査であるため、知り得たデータは断片的なものであるが、本殿の段の石垣、及び本殿と拝殿の間の段は、15世紀以後に造成された可能性が高いと考えられる。むろん平安時代の造営以後様々な改変が行われた可能性は考えられる。もう一つ興味深いのが、春日社前の大量の湧水である。宇治上神社は、現在でも境内に桐原水と呼ばれる湧水があるように、本来山腹の湧水点に祀られた神社ではなかったろうか。

Ⅵ. 白川金色院跡採集資料報告

ここに報告するのは、平成15年３月19日に白川宮の前１－Ｂにおいて採集した輸入陶磁器２点である。

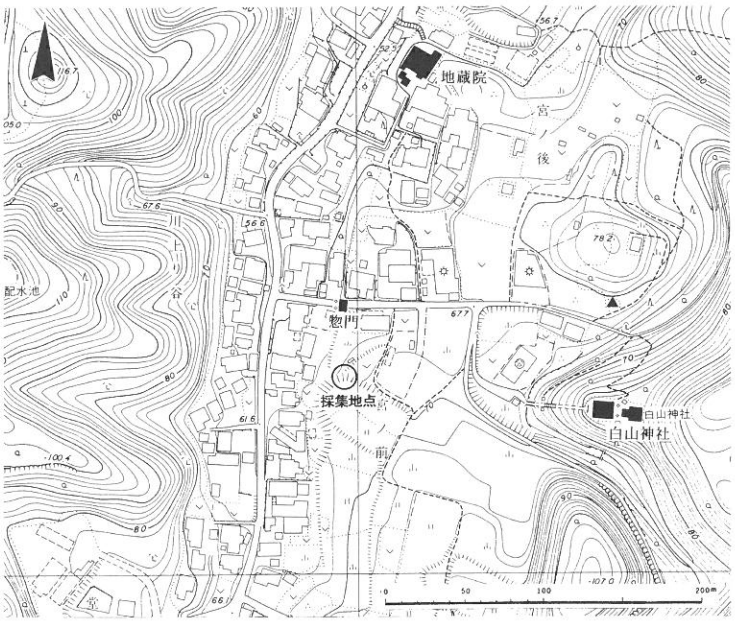
白川金色院跡は、平安時代後期の康和４年（1102）に関白藤原頼通の娘寛子（後冷泉皇后）によって創建されたと伝承される寺跡である。平成５年度から平成14年度までの計10カ年にわたって本市教育委員会が国庫補助事業として、この寺跡の内容・範囲確認を目的とした発掘調査を実施してきた。調査の結果、創建当初の仏堂跡を始めとして平安後期の経塚や室町中期の坊院跡等が良好な状態で確認され、また同時に遺跡の内容においても一級の価値を有する寺跡であることが明らかとなっている。

採集地点は、惣門にほど近い南側の畑地である。寺跡の中心地域であり、これまで度々踏査してきたところでもある。畑地の一角に纏めて置かれており、おそらく畑の耕作時に出土したものと考えられる。いずれも口縁部が欠失した青磁碗片である。

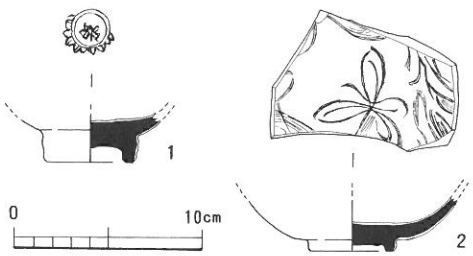
１は暗緑色の釉薬が底部外面を除く全体にかかる。底部内面には刻印草花文を配する。高台径4.6cm、断面長方形状を呈する。

２は龍泉窯系青磁碗である。黄色みをおびた釉薬が底部外面を除く全体にかかる。内面は片切り彫りで蓮花文が表現される。高台径５cm、断面ほぼ方形状を呈する。

白川金色院跡のこれまでの発掘調査で出土した輸入陶磁器は、決して多いとはいえない。今回採集した輸入陶磁器は、貴重な追加資料になるものと思われる。



第49図　採集地点



第50図　陶磁器実測図

抄　　録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ　だい56しゅう
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書　第56集
副書名	宇治市街遺跡（川東・川西地区）、菟道遺跡、若林遺跡、宇治上神社遺跡
巻次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	荒川　史・浜中邦弘・奥　里子・大原　瞳・大西晃靖
編集機関	宇治市歴史資料館
所在地	〒611-0023　京都府宇治市折居台１－１
発行年月日	西暦2004年３月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
宇治市街遺跡（川東地区）	宇治市宇治東内16	26204	108-2	34°53'25"	135°48'37"	021120～030117	200㎡	店舗
菟道遺跡	宇治市菟道大垣内4 他	26204	144	34°53'39"	135°48'53"	030630～030808	302㎡	宅地造成
宇治市街遺跡（川西地区）	宇治市宇治里尻29-8	26204	108-1	34°53'20"	135°48'19"	020515～020516	39㎡	集合住宅
若林遺跡	宇治市伊勢田町若林16-15	26204	119	34°52'40"	135°46'52"	020522	（立会）	個人住宅
宇治上神社遺跡	宇治市宇治山田59	26204	109	34°53'06"	135°48'43"	030124～030312	（立会）	防災施設
白川金色院跡	宇治市白川宮の前1-B	26204	10	34°52'27"	135°48'50"	030319	（遺物採集）	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇治市街遺跡（川東地区）	集　落	近世・近代	井戸・溝・石垣・焙炉	土師器・陶器・磁器	
菟道遺跡	集　落	奈　良	掘立柱建物・井戸	須恵器・土師器	
宇治市街遺跡（川西地区）	集　落	平　安		白磁・土師器・須恵器・瓦・瓦器	
若林遺跡	墓	古　墳	溝	須恵器	
宇治上神社遺跡	散布地	平　安		土師器	
白川金色院跡	寺　院	平　安		陶磁器	

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書

第56集

発行日　平成16年3月31日
発行者　宇治市教育委員会
編　集　宇治市歴史資料館
〒611-0023　宇治市折居台1－1
TEL　0774－39－9260
印　刷　有限会社　新進堂印刷所